WASON
HQ
1104
J74+

Jan. 1898
No. 457

明治三十一年一月十日

女學雜誌

第四百五十七號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百五十七號目次

◎口繪　伊太利國ゼノア府墓地の景

◎社說
去年今日◎年頭墳墓を觀る
逆境を轉活せよ

◎家庭
一家の春　ちやうてい
主婦年頭の覺悟　かもめ
家政日記
子供の育て方に就ての注意　古在豐子
當節の臺所

◎講義
正月のはやしもの　きよくほ
（萬歲◎鳥追◎春駒◎獅子舞◎大黑舞◎寶舟◎懸想文）

◎史談
源平二氏（一）　おうそむ

◎文藝
實朝の和歌（金槐和歌集を讀む）

◎隨感
南遊行（二）
（宛然同樣の內地◎風光明媚の高砂島◎支那人の胆勉◎牛車の悲しき音◎榕樹傘覆の下◎臺灣女學の曙光◎淺ましきは人の相擊つなり◎土人の敎會◎南窓の撫髀）

◎雜錄
遊感隨筆
鬼夫婦
海舟先生詠草　山月子

◎時文
作文寶典◎實驗上の宗敎◎加茂眞淵翁全集上◎皇朝婦女鑑◎新小說第十三◎錯の風◎日の出島◎風船緣◎もしほ草◎新小說第三年一◎御年玉

◎片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際を事にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學敎界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	壹冊價	金拾錢（內國無郵稅）
	半年前金	金一圓
	一年前金	金貳圓
	代金は凡て前金の事◎前金切れの節は封皮の捺印に御注意の上早速御送金有るべし◎後金は定價通の事	
廣告料	一行一回（廿七字詰）	前金十錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	爲替は東京本郷駒込郵便支局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし	

明治廿七年二月十九日內務省許可
明治三十一年一月十四日印刷
明治三十一年一月十五日發行

東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚六百六十番地
發行兼編輯者　巖本善治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏

東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）

第四百五十六號目次

◎社說
女學一年の回顧　鷗村

◎評論
大悟の辨

◎女學
主婦の自殺　曲浦
滔々たる天下其妻を殺すの男子多し
女學校の紀念日　かもしめ
各地工女の狀態（二）
幼兒健康の狀態

◎敎育
教育家の[illegible]　長汀
米國に於ける白知教育の現況◎エルウイン白痴學校の景況◎官學的教育家◎湯武居士に質す（裸體）◎氣質鍛練に關する調査

◎隨感
明治三十年
南遊行（舟航人生に似たり◎意中の文、口頭の吟◎交通は同情なり◎吏德何かあらん◎支那人◎歲暮文虫子を迫ふ）　おうそむ

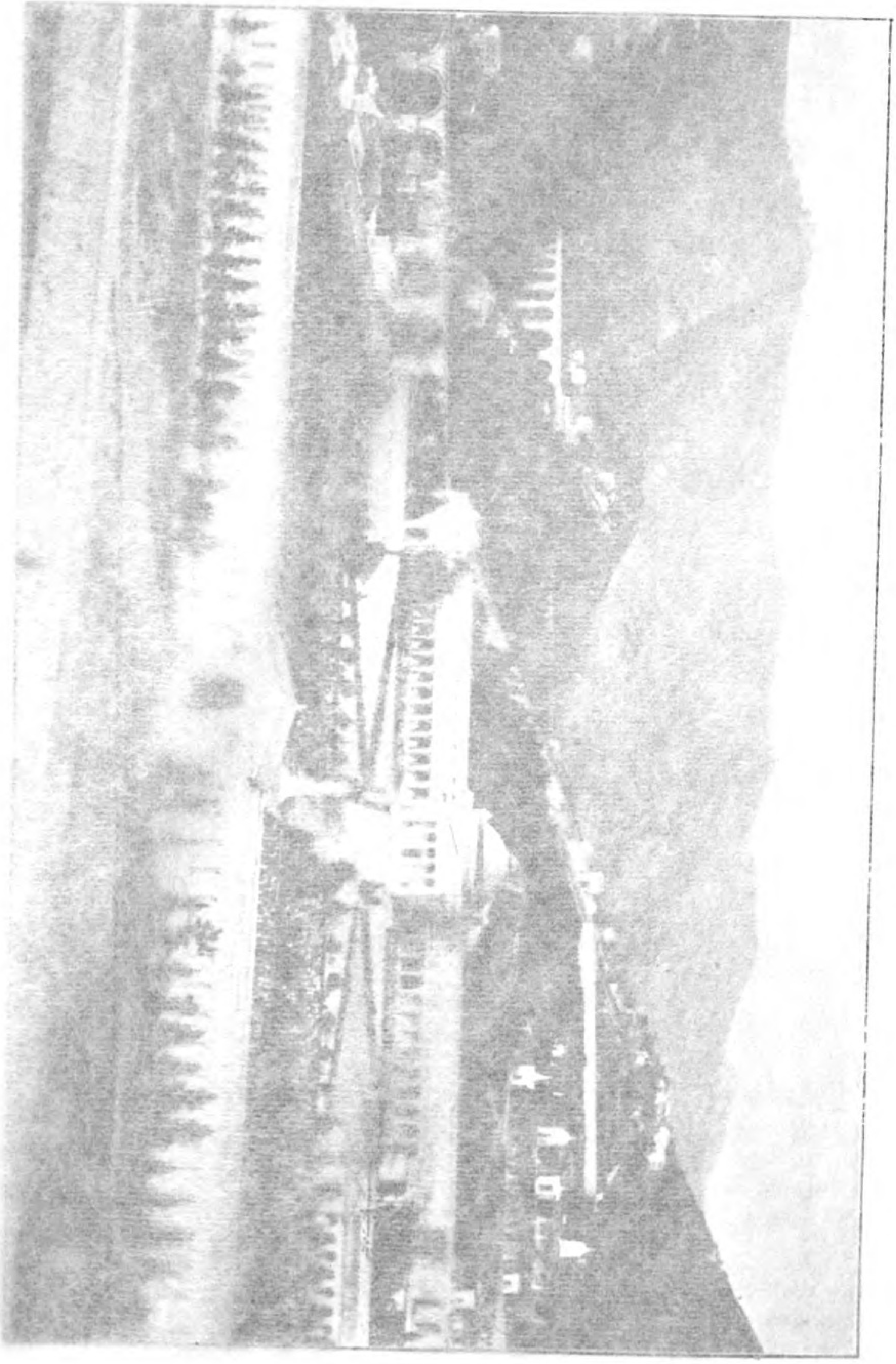
◎雜錄
右大臣實朝
鐵山雜詠　巖本學城

◎時文
女子教育論纂◎女子教育要言◎福澤全集緒言◎普通看病學◎新著月刊第十號

◎片々◎時報

明治三十年度女學雜誌總目錄

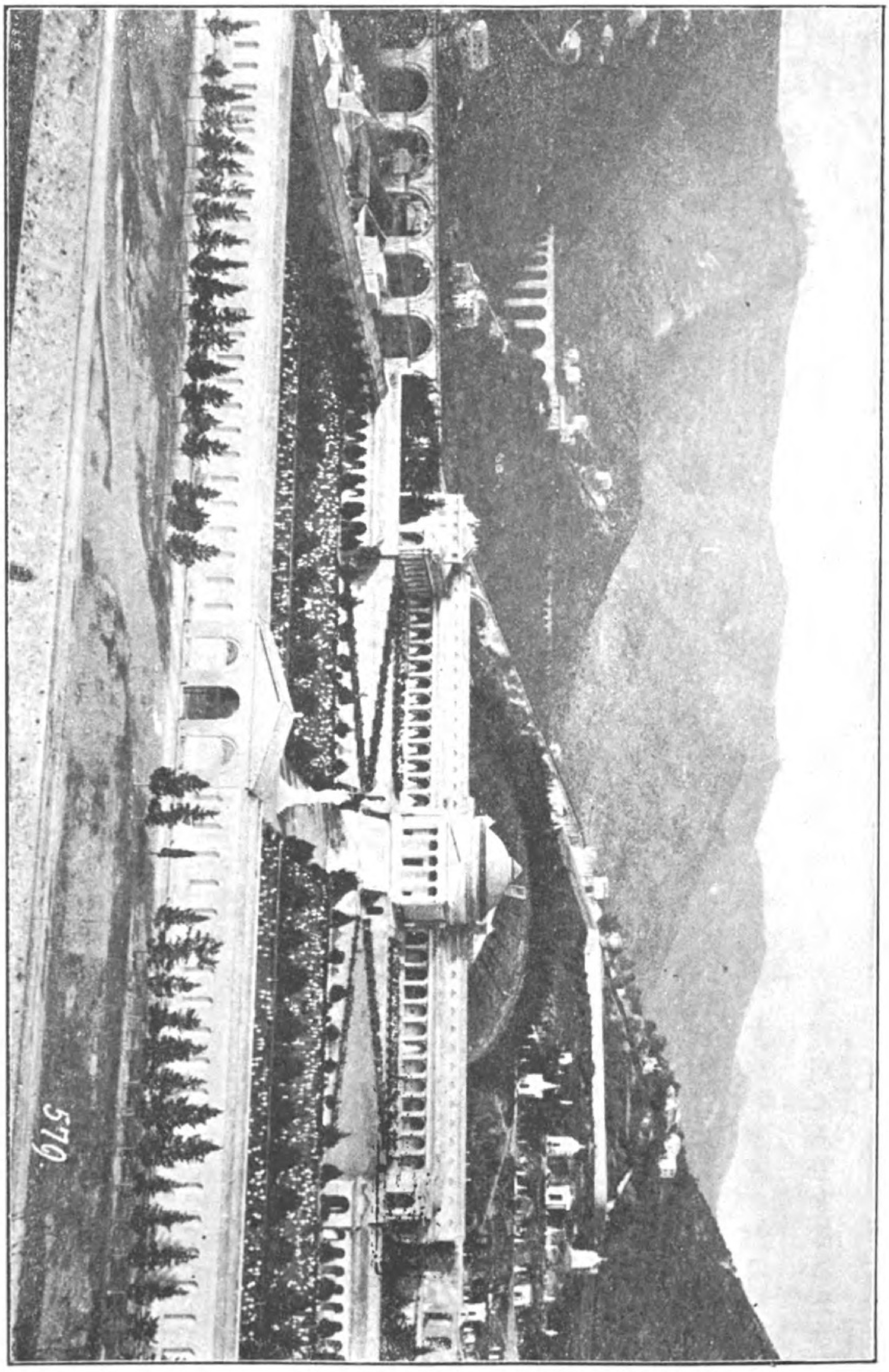
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百五拾七號

明治三十一年一月十日發兌

社説

去年明日

一天万乗の帝、天下億兆の民、悲しき事の紀念未だ滅せざるに、一と歳は早くも周り盡せり。逝くことの追ひがたければ、逝くことの遠きほど彌よ悲し。紀念は之れを重ぬるほどに益々重りゆくものなれ。顧りみれば、此の一と歳は、天重く、地薄く、四時自から定まらず、痛ましき事ぞ多かりける。景色何となく暗淡として。草木の色も引立ぬやうに覺えしは、亦自から大御主の御歎きを知りてや。夫れ、御憂ひは千古盡きず、逝く水の返しがたきよりも倘ほ反しがたしとは申せ、天地同じく打しめり、蒼生の同もに悲しまんと、倘ほひとしほの御物思ひにや候ふべき。仰ぎ願くは、御悲しみの御顔を少こしく解かせ、麗けき天日を八方にかゞやかせしめ玉へとは申す。左るにても、四民徒らに鬩ぎ、故もなきに黨爭し、又亦年々同じきことを繰反さんとするこそ心得ね。天の岩戸の開けんとするに際しては、もろ人皆な歡呼して同に共に歌ひけり。今の臣民は倘ほ古人にも劣るにやある。

年頭墳墓を觀る

我が同胞多年の感覺をして一新改化せしめたきもの二つあり、曰く、幽靈の感。曰く墳墓の感。

幽靈は是れ幻凄寂妙の靈氣にあらずや。人たるもの當に之に念じて高遠の邃思を懷き、深く唯物の障礙より徹して、幽奥神妙の靈界に悟入すべく、之に凄慘の氣を感ずると同時に、快明の光輝あることを感じ、陰陽二面の姿を同觀して、時として天使翻翩の樂しみをも慕ふべき筈也。左るを、同胞只管らに悲痛慘酷たる方にのみ思ひ做して、幽靈と言へば即はち直に忌はしき連感を引起すの習慣あること惜む可の至りなれ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

墳墓につきての思ひ僻めも之に似たり。涅槃極樂の説法、力を失し、浄土托生の教義も次第に消極となりてや、佛法の感化せし文學と其の流弊とは、たゞ〳〵墳墓を悲しき所とのみぞ思はせたる。蓋し、墳墓そのものの建築の妙ならざるが、死後の在處の樂しからぬを思はせたる理由もあるべきなれど、本來、死後の行途を樂しと思はざればこそ、墳墓の建築のやう〳〵に見すぼらしくはなりたるなれ。誰か土臼三杯の墳を見て、身後の哀れの悲しきヿを念はざらんや。亂塔、雨に打れ、白灯、風に破れ、狹き盛土の暫らくにして押流さるゝ躰など見たらん時ぞ、如何でか永生を樂しむものゝ能く堪ふ可き處ならんや。

吾人嘗て曰く、墳墓は是れ靈性的公園なりと。かの社交的公園のいよ〳〵盛んなるによりて、現世の社交の親しきを見る。かの靈性的公園の修整せらるゝヿ彌よ信切なるにあらざれば、吾人は國民に靈性的修養の健全なる發達を認むるヿ能はじ。夫れ、墳墓と靈界とを相接するの地となすヿは、之を山にすとも、之を野にすとも、之を野蠻人にすとも、之を開明人にすとも、素と人性自然の直感なり。豈に事々しく論ひて其是非を定むるヿを要せんや。父母の骨を藏め、愛子愛妻の骸を埋めたらん神聖の地を紀念して、靈の修養所となし、此に幽明二界を結ばせて、人天相接するの道場となさんは、當然の處置ならずや。國民が其の靈性的公園を重んずるは、其の高尚にして靈明なるヿを證しする譽れの印なり。

吾人茲にゼノア公同墓地の縮圖を掲げて、其の麗快高美の風景を万一に見めし、其の如何なる幽邃樂天の氣象に發現せしかを證して、吾人年頭の羨望となす。

逆境を轉活せよ

明治三十年に入るに際しては、主として、逆境に入るの警戒を告げたり。當時人未だ普く覺らざりき。今や三十一年を迎ふるに及びて、人誰れか逆境の既に普きヿを知らざらん。今や當に一轉して之を活かすべきの機會にあらずや。

夫れ、逆境を知るは、之に萎靡せんヿにあらず。之に警戒して大いに稱興せんが爲め也。人生もし草木と伍すべくば止む。苟しくも、一個の天分を領し、銘々不拔の職責を戴かん以上

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

は、男女露命あらん限り、一日だも苟息して可ならんや、進まざるは退く也。退くは、死する也。苟くも、人間の尊ときを知らんものは、其の古人に對して恥ぢざる可らず。其の同胞に對して恥ぢざる可らず。其の明晃々として一點欺むくと能はざる吾良知に對して恥ぢざる可らず。安くんぞ身を苟且にして因循として嚴たる日輪を送るべけんや。

夫れ、今の逆境と云ふものは、大有爲の時期に際しての一頓挫たるのみ。之によりて一の試練を蒙り、以て良き敎訓を辱くせり。當に感謝して更めて發憤し、以て大いに興起すべき也。吾帝國は戰に敗れたるにあらず。吾帝國は世界に恥を蒙れるにあらず。我は償金を要められたるにあらず。吾は地を割きたるにあらず。吾が經濟界の困難なるものは、黃金を得て而して難める耳、初めより奪はれたるにあらず。吾が人心の萎靡なるものは、大空望の少しく挫けたる耳、初めより意外の難事にありしにはあらず。同胞そもそも何をか歎く。今の逆境の如きは、寧ろ順に過たるの逆境に外ならず。眞乎困厄の人より見れば、反つて一冷笑に價ひすべき耳。南方を見れば、美島の富は過半埋もれたり。北方を見れば、雪下の畠は大半拓かれざる也。金銀、炭、鹽、到る處に存し、四面、魚介に滿ち、山皆な樹木を植えられんと待、人口攘々皆な、皇帝を仰ぎて同胞たり。たとひ些少の爭鬪ありと雖ども、畢竟、兄弟の墻に鬩ぐに異ならず。何ぞ外侮を容んや。今の逆境の如きに迷惑するものありとせば、抑も將來の大活劇を如何せんとするや。

語を寄す、島内四方の兄姉、新年志氣を一新して、其の經營を壯んにし、大いに肚腹を滿たして、銳意、其の任に當らんとを、人性、逆境あるは、進歩の良藥なり。國の亡ぶるは其の太平に於てし、家の衰ふるは其奢に於てし、人の病むは其無事に於てす。有志安んぞ逆境に萎靡すべけんや。

蓋し、逆境は人才を勵磨し、亦た人才を淘汰す。一と度び逆境を經ずして而して人才の發揮せしことは未だ曾てあらざる也。もし此の逆境に際して萎靡として振ざるものあらば、大勢に後れて之より振ひ落さると知れ。彌よ之に雄志を鼓舞し來るものは乃はち大任其上に臨み來ると知れ。天豈に容易に月桂樹を與へんや。蒼生を愛するの故に、蒼生を托するの人を擇ぶや極めて嚴密なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家庭

一家の春

去年の暮、臺灣に遊べば、十二月と云ふ冬の眞中に蚊張を吊るして、宛がら夏の心地したり。今にして去歳の盛夏に遊ひたる北海道の事を想像するに、一陽の來復は中々にて、梅の咲かんは桃櫻と一時なるべく、定めし四五月の末にやあるらん。所のかはるにつれて、春の來るの晩き早き斯の如く懸隔せり。一家に春の催ふし來る、千門万戸豈に必らずしも同日と言はんや。

門に松を立て、軒に七五三縄をかざり海老の腰まがる迄で、家だい／＼の祝儀あれと壽くとも、家門實際の福の神を宿さずば、さして目出度き事はなかるべし。元日は何となく陽氣にして、屠蘇は邪氣を拂ふものとは言へど、一杯の酒、三斗の酢を消しがたく、万斛の涙は倘更らに拭ひがたし。衣紋かひつくろひたる下に、胸の漣しづまらず、扇もつ手の震るひをのゝかん時、如何でか千秋万歳の慶賀に我を忘ずるとを得んや。

實に、人の世は謚面つくりてのみ暮すべきにあらず。花盛なれば、夜といへど燈をつけて樂しみ、歲更まれば、怨言も黄鳥の聲と聞ながさんずる由緒はありと云へど、然りとても人心は久しく醉はせがたし、いつ迄も魔醉せしめて、遂に之を欺むくを得んや。眞に取りがたき悦樂は、僥倖をもて收めがたし。現に其の正味を喫せずば、風の便りに香りを嗅ぎてのみ止まんほかなし。

彼の麗はしき家庭を見よ。たとひ祝儀の器は満足せず、春着の衣はそろはずとも、一家のつぢつま甘く治まり、心の方圓丸ろく整ふときは、季節、節句のふし／＼は、團欒を貫くの樂しき結び目にして、其の都度、悦びを新たにせずと云ふとなし。一歲を加ふるは、老父の額の筋一つ增し、其髮の毛の一すぢ白くなるとなれど、孫の成人と、子の成業とは、歩々に幸ひを重ねて、家の祝福を增さゝるなし。父母彌よ年老いて、其子いよ／＼幼な氣になり、終生親和の氣を軟らかにして、一家絶えて硬は張たるとなし。之れ眞に陽春の瑞氣にあ

らずや。

夫れ、心に春なきものは、春の花を見るとも楽しきことなし。反りて哀情を増さんのみ。一家先づ陽春の氣味なくんば、年更まり、東風氷を溶きて、千門万戸に春の祝ひを寄せ來らんとする時にも、其の慶賀を受けなんこと難し、詳かに思へ、太陽、天上に笑ひ、山色緑を増し、小雀、新禧を歌ひ、泉河楽しく流るゝの年首に接し乍ら、吾が一家心根を盡して眞に之を悦喜する能はざるは、何事の理由ありてぞと。抑も、傍らに愛兒侍べり、膳に數の子を置き、屠蘇を注ぎて年賀相祝し乍ら、心中依然煩悶ありとは、何事の不幸ぞ。仔細に其の由縁を熟慮すべし。

其の由縁を熟慮して、其の源因を他の故に歸せんとするものは、遂にいつ迄も發明の期なけん。玆に飜然醒悟して、根本より改め、新年、心を爽かにして、轉として思を飜へし、當に今歳を期して一家修整の土台を易え、盟つて家庭の改革に決心すべし。

但し、家庭の改革は、社會の改革と趣きを異にす。但だ相忍び、以て相愛するにある也。氣のつきたる者より、無理を制し、心付たるを初として我儘を止め、只だ心置なく、隔てなく、二ごゝろなく、信愛して家中を楽しくせんと思ひ立ち、つとめて一家に春を來さんことを肝要とすべき也。若し此の決心に覺悟せば、ことし未だ十分の和楽なくとも、春は既に枝頭に兆して、其の一部分は最早吾が庭前に來れるなり。何んぞ感謝せざるを得ん。

主婦年頭の覺悟

ちやうてい

我皇、明治の御世も、既に三十一年となりて、今爰に其旦に逢へり。我等が身、我等が家、我等が國は、皆共に一歳の齢を加へたり。一年の計は元朝にありとの、古訓は、年々に思ひ出さるゝことなるが、去年よりも今年は、多くの經驗を積み、思慮を増したることなれば、この年頭の計の、更に深厚なるものあるべきは當然なり。個人一家一國、この春は、如何に一年の計をや定めたる、こは聞かま欲しきことなるが、今は爰に、殊に問はん、一家の主婦たるもの、其家道を齊理する

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

如上に、將來の日月に對つて、如何の覺悟を得たりやと。』回顧すれば過にし一年や、瞬間に去しが如く思るゝと雖も、來るべき三百有餘日は、渺々として遙なり。一身一家の上、如何なる事件の湧出し來るべきや、今より豫測すべからず。またかるゝ事の必ずやあるべきを覺悟せざるべからず。主婦たるもの、一家を修むるに於て、如今何程の成竹ありや。』一年の日子を無事に通過せんとは、頗る難いかな。されば年の始めに逢ふ身は戰々兢々として薄氷を踏むの思なくんばあらず。主婦試みに、去年の一家の經歷如何を思へ、圖ざりし事々の甚だ多かりしを知らん。而して今年の行末は、去年の經歷を以て定規となすべからざるもの、必ずや起り來らん。先づ日々の食膳、四季の洗濯裁縫、こは定まりたることながら、一年の長日月中、これを處理せんとせば、中々に容易ならず。此等は五年も十年も同一樣の事を繰返すに似れども、其中自から、稍多少の變化あり。これとても豫め計を定てゝ、これに應ぜずんばあらず。まして思ひ掛けなき大事の、何時來るべきやも知れざるに於ては、前以に覺悟する處なくんばあらず。不測の大事を覺悟して、一年を進めば、いよ〳〵其大事に臨んで、必ずしも狼狽するとを要せじ。畢竟するに思ひ掛けなき事件といふも、事の偶然たるに非ず、之に對する人心の慮なきが故なり。

主婦の憂は一家にあり、年々改まり來る毎に、この一歲時間は、必ずや多事ありと覺悟せよ。我一身の慮りは素より、夫の出世、子女の立身もあらん、久しく會ざりし人にも逢ふべし、玉の如き和子を設くるともあるべし。多くの幸福の降るともあるべし。多幸ならん時は、これに處するの覺悟如何あるべきや、この春に於て、考慮すべし。

而も人生幸福多からず、此年に於て、或は父母の先だつ別に悲しむともあらん。子女の亡骸に泪禁ずるともあらん。夫に後れて、歎きの數を積むともあるべし。生別またあるべし、一家を禍ひするの失敗もあるべし。幸よりも不幸なるとの多きは、人の世の習にて、その不幸は、偶然として下來するが如きさまあるものぞかし。これに處して、主婦其心の則を失はず、禍を轉じて、之を福となさんとは、多分の度胸と覺悟とを要す。一歲の發端に立ちて、主婦たるもの或は禍來るべしと覺悟して、其禍の何たるにも關らず、よく之に處し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、其刺を鈍うし得べき、廟算既にありや否や。無心にして過さば、一年は愚、十年また百年と雖ども、乍ちにして、之を送り得べし。されど、心を潜めて、覺悟したる上は、一分時とても、中々に過し難きものなり。さらば無心空漠として年を送迎せんか、決して然らず。時辰の齒輪の一つゞゝに刻み行くと共に、人々心を練り、才をみがき、德に進むべきの責任あり。よく之をなさんと、其豫め有する覺悟にあり。人の世に處するに、常に深く覺悟する處あるべし。一歳の新舊交に劃然として區別せらるゝは、天人共に勸めて更に一番の覺悟を得よと暗示する所以なり。殊に况んや主婦の覺悟は、一家の禍福榮辱に關する大なるに於てをや、安んぞ此新春に當りて、一年の家道、如何に齊理すべきかと、潜心廟算する處なくして可ならんや。

門毎にたつる小松にかざゝれて
やどてふ宿に春は來にけり
西行

家政日記

かもめ

此節は、年々に、色々なる日記帳の出版せらるゝと增加するを見ても、日記を附ける人の殖えつゝあるとも知るゝなり。日記てふものは日々の些かなる出來事を、一年三百六十餘日、落ちなく、附け通すといふとは、割合に六ヶ敷ものにて、樣々の出來事の爲、または失念の爲、忘れるとも多きものなり。また、之を附けるは、何だか無益の樣にも思はる。さりながら、よく〳〵氣を附けて、記しとめたる日記を、後より、殊に年の暮などに、繰り返し見るときは、中々に面白きものにて、無念無想で過したやうな一年が、頗る多事の時代で、喜憂の數も、幾度か移り變りたる跡を見て、此年も、無事に暮らしたるを、一入深く慶賀するの情がある。また迎へたる年に對しても、一層の覺悟を以て進む意にもなる。一人の日記は、其者が一代の傳記を、日々に自作しつゝあるのであり、一家の日記は、先祖傳來の系圖歷史に、日々事跡に增加しつゝあるものである。されば日記てふものは、一人一家

が、之を子々孫々に遺すべき、一大紀念物となるものなりとの考へを以て記し付くべきである。

かやうにいへば、日記てふものは、中々輕忽ならぬものである。さやうな重々しいものは、無乃なきがよし。一日の事は日の入ると共に葬らしめよ流義で日記を附ぬものもある。去かし、左様の六ヶ敷とは扨て措いて、日記といふものは、至極重寶なものである。一日々々の考へた事などを書き留めなくつても、先づ、手紙の往復、自他の來往、我身我家に起つたる、覺えて置くべき事實を記し付け置くのみにても、中々役に立つて、人に對して義理を欠かぬやうにも出來る。

殊に家庭に日記のあるは、尤も重寶なるものにて、而して主婦たるものは、必ず一部の日記帳を擔當すべきものなり。それに付くべき事は、日々の食膳の事、洗濯の事、裁縫の事、手紙の往復の事、人々の來往の事、小兒の成長の事、其教育の事、又其健康の事、夫の外出の事、など其他様々に、主婦として、一家に關する事柄の、記し置くべきもの多し。また日々過ぎたる事實を記すのみならず、豫め夫また自分が、何々をすべき日、名々の誕生日の事、死者の命日のことなどを、其月日に當て〻記錄し置かば、失念の誤りを拒ぐを得べし。

主婦は、我家庭の歷史を編述するの心を以て、日記を附くべし。さりながら、大ぎやうなる目論見を以てせずとも可なり。たゞ〱簡畧に、忘れぬために、一筆記して置くつもりにてよし。それが、大に後日の爲めになるなり。また日記を附くるは、夜、寢に附く前の仕事と定め置くべし。さらば附け落しする日といふともなくなるべし。

稚兒の育て方に就ての注意

古在豊子

稚き子を育てむに、智德體の三育中、何れを先にすべき乎といふ事に就ては、敎育學上夫れ〲の定論あるとならむ。されどおのれは、さる高尚なる方面よりならで、實際上おのが感得したる點よりいはんとす。よく人のいふ話に、或母生後二三歲なる稚兒を抱きて、此兒の敎育は何時頃より始むべき乎と問ひたりしに、さては既に二三歲後れたりと答へたる學

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

者ありとの事なれば、稚兒は生るゝややがて、否寧ろ胎内に在る時よりして、教育の準備あるべきは至當の事ならむ。されどさる精緻なる議論は、是も亦姑く爰には取除けとしていはむには、我は先づ躰育をこそ、最先に重んずべき事ならむと思ふ。智育の如きは、寧ろ自然の發達に任せおき、幼稚園に入りたらむ時より始めて多少の注入を受けしむる位にてよかるべし。但德育の點に至りては、躰育と共に、最先より注意すべき事なるも、健全なる身躰に對してならでは、健全なるしつけ方をもなし難きが實際なれば、扨こそ躰育を先にすべしとはいひつるなれ。不健全なる稚兒に對して、健全なるしつけ方をなさむとせば、勢ひ稚兒を激せしむる事もあるべければ、軟き腦に刺戟を與ふる事大方ならず。幸に强健なる兒ならむには、別段爲に身躰に影響を及ぼす事あるまじきも、少しく虛弱の兒ならむには、爲に不測の病を惹起す事あるものなり。故に健全なる教育を施さむには、先づ其躰を健全なるものとならしめざるべからず。かくいはゞ或は一派の論者はいはむ、不健全なる精神の人として、現世に生存せむは、寧ろ不健全なる身躰の人として、在らむよりも劣れるにあらずやと。是一應其理なきにあらず、されど其は成年の人に就ていはむのみ。稚兒の時代に在りては、何事も未確定に屬するものにて、偏に他日の準備をなすに止まるものなれば、未だ俄にさる嚴正なる論斷を下すべきにあらず。先づ其精神の器たる身躰を健全ならしむるを第一に心掛け、年の長ずるに從ひて、漸次に其精神を健全ならしむるの方針を採らむこそ、一擧兩全の策なるべけれ。

◎子供は大人の雛形に非ず　多くの人殊に母たる人の子供を育つるには、何事も大人しやかに〳〵といひて、恰も子供をして、小き大人の如くならしめむと試るかの觀あり。是いふ迄もなし甚だ誤れる事にて、子供を育つるの道に非ず。子供は何處迄も子供だけの行作にて宜し。强て大人の眞似をして、幾度もお辭儀するにも及ばじ。甚しき不行儀亂暴をなすに非る限りは、大人の如く靜坐沈默せしむるにも及ばず。世には大人同士さま〴〵の談話をなして時刻を移し、其傍に在る子供の退屈して少しく騒ぎ出したらむ時、大人しくおしよ、靜に〳〵と制する人あれど、制するはまだしも宜し、ほんとに仕やうのない子だよと、いきなり叱る人あり子供に

取りては是實に迷惑至極なる事なり。自分に關係もなく且分りもせぬ大人の談話を、少時にても傾聽し居たるは、是子供の地位上、據なき忍耐なりしなり。さるを猶且其上忍耐せよとて叱責するは、是豈無理なる注文にはあらずや。是は只其一例に過ぎざれど、何角に付け子供をして、直に大人の如く在らしめむとするは非なり。子供は大人の雛形にはあらず、唯大人の卵子なりといふ事を心に記して子供に臨まむには、日々子供を叱る事の幾分は、大人の無理にてあるヿを覺るなるべし。換言すれば子供に望むの行作は、大人の心をのみ以て律すべきには非ず、姑く子供の地位に身を置きて、而して其行作如何と考ふるを要す。扨は不行儀不從順なりと叱する事の、却て子供に望む可からざる事なるを發見すべきなり。さなくては知らず知らざる間に子供の天地は狹められ、削られ、上下左右に伸ぶべき、勢力を抑損せられて、子供の時に小さき大人たりし代りに、大人となりし時に於ても亦、小さき大人たるを免れざるの恐あらんとす。

當節の臺處

◎柚餅子の製法　柚のほその方を細くくりぬき、中身を去る。ひろく口をあくれば惡しゝ。ひろければ、蒸をかくる時に裂くるなり。壺も底もよく洗ひ、扨好き味噌を能くすりて、砂糖を適當に擂り合せ、胡麻、胡桃、榧實など入れて、味噌に交ぜ合せ、或は糯米の干飯を細末にして、篩にてふろひ、味噌三分一ほど入れて擂り合せたるも最もよろし。或は辛きを好まば、砂糖を去りて胡椒生薑等を加ふべし。右の味噌を柚の內へ、八分目程入、蒸籠にて蒸し、よく熟したる時取出し、日に干し、乾きて少し皺のよりたる時、よく重石をかけ、四五日程置きて取出し、能々日に乾して、藁の苞の薄きものに入れ包み、風吹所に釣りて置くべし。凡、抽べしには、柚の酢を加ふべからず。

◎金柑べしの法　金柑の大なるを取り、醬油にて煮しめて、ざるに揚げ、三四日程日に干して、壺に入れ、口をよく封じ、風ひかざるやうに收おくべし。

◎九年母びしほの法　九年母を濃き醬油にて煮しめ、實をさり、皮も肉も細にたゝき、壺に入れふたをして封置くべし。

◎橙餅子の法　橙に所々穴をあけ、濃き醬油にて煮しめ、日にほして貯へ置くべし。

◎白味噌の製法　大豆一石の皮を去り、水に浸し蒸し熟して、上白の米麴一石五斗或は二石入、鹽三斗合てよく〳〵臼にて舂き、桶につめ置、三十日計して用う。

◎五斗味噌を製する法　大豆一斗麴一斗酒糟一斗米糠一斗鹽一斗、右一つに合す。此味噌性輕く病人に適してまた魚肉などを煮るによろし。

◎ぬか味噌の製法　米のぬかを水にて固くこれ、甑にて能くむして熟したる時、火をたきすて、其まゝ置、翌日色つきたる時、取出し、糠一合に鹽一斗五升並に醬油の滓を入れ、臼にて能つき交ぜ、取上げ、濕氣の殘りたるを冷し、桶にても瓶にてもつめ、蓋をして置き、來年正月に取出し、又臼に入れつきて、その器に入れ置くべし。

◎別法　糠を水にて固くこれ、大さ兩の掌の內に滿る程に丸くかため、桶にても瓶にても入れ置き、十五日許をへて、麴出たる時、日に乾し、臼にてつきくだき、水と汐とを入れて、つき交ぜ、とりあげ、桶にても瓶にても器に入れ、蓋をなし置く。汐は舐めてよき加減にすべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

講　義

正月の囃もの

きよくぼ

新玉の春立ちかへる旦、百囀の雀の聲と共に、タウタウタラリ〳〵ラフ一本めにはと、千秋万歳を壽く聲、せんぢよまんぢよの鳥追ひはと、三絃に囃し立つる、又は、めでたや〳〵春の始の春駒が舞ひ込んだと騒がしくするも、何も目出度しと覺ゆるは、春に歸りし人の心ゆゑなるべし。そも、萬歳、鳥追、春駒の三つは、古へより、春の始の祝事として行はれ、萬歳は造宅の祝事、鳥追は田事の祝事、春駒は蠶業の祝事をいふものなるよし。いまこれ等三つのものを始め、其外正月の囃ものに就きて、いさゝか其由來を考究せん。

◎萬　歳

烏帽子素襖に義經袴を穿ち、高履ふみしめ鼓もち、大黒頭巾冠り袋負へる才蔵を引つれて、家々をめぐりて、祝詞をのぶる萬歳てふもの、そのおこりは、何時なりしか定かに知れず。傳へいふ、神武帝、大和橿原に、大宮居を營ませられし折、音頭をとりし者より始まるといふ。其子孫等代々に朝廷に仕ふまつりて、此役を勤めしが、元來名もなき賤しき者なれば、其音頭の聲を其儘に、千秋万歳と呼びしが、いつか、万歳とのみいふ事になりしものといふ、これ大和万歳の起りなりとぞ。三河万歳といふは、人皇六十六代、一條院の朝、長徳年間に、大江定基、參河守に任ぜられしに、此人博學多才佛道にも疎からざりしかば、佛道東漸の事を唱歌に作りて、正月の蹈舞を民に敎へけるに始まりたりといふ。其もとは大和万歳に出でしものなるべし。大和万歳三河万歳の外に、また加賀万歳といふものあり。

今もなほ東京に來る万歳は三河より出づるものゝよしにて、而して大和万歳は、昔より京都へ出でしなり。御一新までは、毎年の嘉例にて、三河の万歳が柳營に祝詞を述べたり。また古へ朝廷にては、京の町の富家の主人等、年番の順序によりて、毎年正月五日に參內して、千秋万歳の祝を述べたりしとぞ。さりながら此事舊き記錄には見えねば、近昔よりの事な

りしなるべし。
殊に三河万歳は北條氏執權の頃ほひより行はれしといふと雖も、其盛となりしは徳川氏時代に在り。
昔、朝廷にて行はれし万歳の祝詞は左の如し。

徳若に御万歳、君は栄えて御はします、先、新玉の年立そむるあしたより、木も若やぎ、木芽も咲栄えけるは、誠に目出度候ふべし。左青龍右白虎前朱雀後玄武、四神相應の所には天より七福降り〱、地より七寶相生す。左青龍の東には、富の小川が流れて、其水上を尋るに、浮木に乗りし張伯が、霞の波に溯りて、霞に橋を渡せば、雲の上まで續くらんも、誠に目出度候べし。右白虎の西には、龍門の波高くたつぷり菊水流れて、そもや又此君王の久しかるべきためしには、夜うつ波は金銀瑠璃、ひる打波は、吉事續くらんも、誠に目出度候べし。前朱雀の南には、名花の種を蒔きて四面の池を消して、所々に入江を築かれ、池の中なる島々に植たる木の名は何々、芙、しやうび、から薔薇、南天木には、りんちやう花。岸のうつろに山吹、寶命草、あやめに、下には浮草、金銀草、沖の鷗がたはぶれて、渚の千鳥はちり〱さ、孔雀鳳凰は、ぬれ〱みて、吼々さ答へ、げにも誠に目出度候べし。後玄武の北には、玉山寶珠の山高く峙えて、峯の霞はいけぶり、谷江の泝水は、酒の泉で、空を走る小男鹿、槍をつたふ猿猴さ、呼子鳥の万歳さ吹く風は、天地を動かさいで、風は枝を鳴らさいで、宮殿樓閣建ならべ、軒を並べし栄えける、誠に目出度候べし。新程目出度き地の黒の實の君王の御所造り、ありやうは、讃めいはひ給ひけるも、誠に目出度候べし、徳若に御万歳さ君は栄えておはします。

三河万歳の今日にも唱ふ歌は、一本めにはといひて、一より十二までの柱を數へて、神々の名を申し添えて、徳若に御万歳と祝ふなり。いづれも家相、地相の祝ひをのぶるものなり。

徳若とは、即ちとこ若、とことはに若やぎての意なり。此外また、やしよめ〱京の町のやしよめなどいふ、やゝたはれたる唱歌を歌ふもあり。万歳の事、御一新後は、しばらく廢れたりしが、明治十六年よりして、また〱官許を得て、今又、春の始め、都の町々に、タゥ〱タラリ〱の聲を聞くにいたりぬ。

◎鳥追

昔、延文年間に、參河國の長者の家に仕へて、田園の鳥を追ふとを日々の務めとなしたるもの、年の始めに、さゝらをすりて、長者の壽を歌にうたひて、祝ひたるが初めなりとか。今は女乞食などが、正月の松の内に、あみ笠をかぶりて人の門々に立ち、三味線引きて歌うたひ、錢を乞ふとなれり。鳥追の唱歌といふもの、左に近世のものを示さん。

せん岡や万岡の、鳥追がまゐりて、おしうげもよれやろが、よれやろがトやうなら、國や繁がまゐりて、宿かり候へば、殿も栄え榮ゆる、御代もさかえ榮ふる、お長者のお庭に、音のするのは誰々ぞ。右大臣に左大臣、關白様の鳥追に近衛様の鳥追、吾妻の方には、酒井様に榊原、井伊に本多の鳥追、松平の御代は、万々歳の壽さ、祝ひ納めておめでたや。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎春駒

古へ、宮中にては、正月七日に、白馬の節會（此事枕の草紙などにも見ゆ。）とて行はせられたる事の、下々に傳はりて、正月に、乞食ども、馬の頭をつくりて。人々の門にてめでたや〳〵と囃し立つるなり。彼の節會の由來は、正月七日に白馬を見れば、一年中の厄を拂ふといふにあれば、春駒の由來もまたこれにあるべし。然るに一說には、蠶と馬と同氣なると周禮にも見えたれば、こはやがて養蠶の祝ひなりといへり。

◎獅子舞

かの獅子の面なるものは、朝鮮より傳はりしか、果た支那よりか、また印度よりか、そは定かならねども、古へより我國に傳はりて、獅子舞の事、田樂などと幷び行はる。而も獅子は厄魔を攘ふの目出度きものとして、神事に用ゐられ、祭事には必ず舞はる。除夜、正月などに獅子舞の町々家々を、囃し行くは、即ち來るべき年の厄攘の爲めなりとす。獅子舞に伴ひて、太々神樂、正月には商家または貴人の家にて行はる。

◎大黒舞

乞食ども正月に異形の面などかぶりて門々に立ちて、舞をなし錢穀を乞ふものを、大黒舞といへり。今の世には廢れて殆ど見ることなし。

◎寶船

正月元日の夜、おたから〳〵と呼びありきて、寶船の圖を印せる紙を賣りありく。俗間にては、此紙を求めて、此夜枕の下に入れて、ねむれば、吉夢を結ぶといひならはせり。此事、中古以前は知らず、足利氏室町時代には、既に行はれて、其頃には節分の夜に用ゐるものとて、將軍家にも之を召されたりとぞ。此畫紙、昔は寶舟ならで、たゞ米俵を積みたる舟の畫を印して、其意味はいねつむとて年の初に寐ることを然くいふなりとぞ。また舟は物を載せて流すものなれば、惡夢を流すといふ心より來りたるものとも見ゆ。しかるに後世

に至りて、今の書となりしは、一富士二鷹三茄子の吉夢を寶玉滿々たる寶舟に積まんとの利欲心よりなるべし。また舟に○貘の字を書きたるものあり。○貘といふ獸は、夢を食ふものと傳ふるより起る。

◎懸想文

寛文以前には正月十五日間京の町を、懸想文賣りとて、烏帽子、素襖きて小さ刀さしたる覆面の男が、梅の枝に、女文にて書きたる文結びて、懸想文々々々々といひて賣りありきたり、また後には、編笠着て賣りありく。買ひたるもの元旦に其文を開きて、其年の運を占ふといへり。また小さなる紙に洗米二三粒入れたるを懸想文といひて賣り、買ひたるものに、或は夫婦の語らひの事、或は商賣の事、又は物かく事、其他望む事何によらず、樣々目出度事をいひつゝけて聞かせたる頃もありしとかや。後しばらく廢れしが、今は、京都の正月に、笹の葉に文結びて、賣りありき、其昔のさま見ゆるなり。東都の寶舟は、西都の懸想文、後者は、處からとてやさしく雅かなる節あり。

史談

源平二氏（一）

おうそむ

種々の正史、または盛衰記、平家物語等の類史を讀むの時源平二氏が榮枯盛衰の跡に、人世轉變の感慨を抱き、また此二氏の功罪を鑑みて、興味頗る多きを覺ゆ。されば、今爰に讀史餘の私見を、思ひ出づるまゝに、順序亂らに書きつらねて、大方の一粲に供せんとす。

◎淸盛賴朝以前の源平二氏の事跡を見るに、源氏には、滿仲賴光、賴信、賴義、義家の如き名將が多く輩出して、王家に盡瘁するの功、頗る大なるものがあつた。然るに平家に至りては、貞盛の如きありと雖も、迚も源家の人々に匹敵し得べき技倆はなかつたらしい。賴義義家が、奥州の征伐に苦心した事跡などは、之を讀めば、淚がこぼれる、朝廷は之に官符を下さず、兵糧足らぬに、よく士卒の志を收めて、己に叛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くものなからしめたは、この兩人が將に將たるの力量、恐るべきものがあつたからだ。清原武則が、鳥海の柵にて、賴義に告げて、將軍、忠を天子に盡し、野に暴露する十餘年、頭髮皆白し、天地爲めに動き、將士爲めに奮ふ、虜を破ぶること、河を決するが如し、臣今將軍を視るに髮復た半黑なりといひたるは、强ち媚び諛つた言ではなくて、將軍の氣慨、頗る人心を服せしむるものがあつたからであらう。

◎後三年の役に、義家をして充分に勞させて置きながら、亂平いで後に、朝廷は之を目するに私鬪を以てした。然るに義家が、虜首を塗に棄てゝ、怨みがましい擧動に出でず、矢張朝家に奉じて一生を了へたのは、度量の大なのが見える。もしこれが賴朝か尊氏か義貞の如きものであつたならば、直ちに叛旗を擧げたであらう。義家は決して私鬪といふ考は無かつたらう、それは其一生を見てしれる。山陽が、義家もし一たび手に唾して立たば、關以東、賴朝の手を待たずして、既に源家の有となつたであらう、然るに敢て臣節を失はずして其身を終へたと論じたるは、至極尤の說だ。而して長袖寛帶の大宮人等は、花月の詠に悠長を氣取つて、武家を輕んじたは關東の武士共をして、いよ〱源家に附隨せしめることゝなり、曾て朝恩に浴せずして、賴義義家の如き眞主の厚恩に感ずること深く、中には、我主は、何故に覇業を立てゝ呉れぬのかと齒がゆがつたものもあつたらう。然るに義家の如きは、甘くこれをなつけて、（義家が臣下を愛撫するの度量は、敵の宗任をして、心服せしめたのでも分る。）決して異心を朝家に挾まなかつた志は、實に美はしい。

◎關東の武士共は、賴義義家の恩義ありしが爲めに、源家の爲めには、敢て死することを辭せないやうになつた。されば、義朝が若し、尾張の內海で、家人の手に斃れずして、首尾よく、關東まで落ち延びたならば、或は其處で覇業を開くことが出來たであらう。鎌田政家の如きは、實に此事の出來ることを豫知したから、主從共々に東へと志ざしたのであらう。秩父、三浦、和田の一門などは、賴義義家以來、常に源氏の正統を奉戴せんことを祈つて居たのだ。

◎されば賴朝が、一擧して、之に從ふもの、多かつたのは、決して賴朝といふ人物に服したのではなくて、實は先祖の御陰だ。恐らくは、三浦和田の一門などは、賴朝が如何やうな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人物であるかも知らなかつたらう。然るに、三浦義明が、頼朝の使を受けしや、老病を扶けて諸兒孫を召して、吾家世世源氏に仕ふ、汝等佐公の爲めに死せよといつたのは、實は頼義義家の恩を報ずるの念、其家門代々の精神となつてゐたからである。義經か、奥州秀衡の庇陰に成長したのも、頼朝と條件を等うしたのだ。されば若し、源氏に頼義義家が無かつたならば、頼朝義經如何に英邁なりと雖も、迚も覇業を關八州に建つるとは出來なかつた。

◎頼朝は實に先祖の恩義下に及んだ御陰を以て立つて而して其一代に之を消滅したのである。

◎頼義義家が、人心を收たのには、其關東に勢力を行つたのが、大變な便利となつたのである。由來關東の人間は關西に比べると正直で、義に堅い。源氏の覇業は、即ち關東武士の擁持する處となつたから出來たのだ。これが關西か若しくは中國であつたならば、出來なかつたらう。

◎平家には、頼義義家の如き名將が居なかつた。即ち人心を收攬して子孫の爲に堅固な土臺を据ゑ置くものがなかつた。夫故、清盛の權柄を執るとが出來たのは、忠盛か、官的

に鳥羽白河などの寵愛を得て、祇園女御の閨門の力を假つた御陰であつた。されば、其起り方は、源家から見ると賤しい、また至極の僥倖であつた。源氏の大將には、いつでも一擧して關八州を靡ける丈の基礎が立つてゐたに、平家には全くこれが無かつた。されば、平家に覇王の業は、迚も開かれぬのであつた。僥倖に、天子の寵愛を獲たのと、當時の藤原氏に英物がなかつて、また公卿がいづれも愚物であつたから、清盛の力に敵せず、遂に彼をして、藤原氏の權を奪はしめた。平家が、京都の朝廷に、一門の首を並べて、大臣大將の空位虚名を、第一の志望としたのは、家業の上には大の拙策ではあつたが、またこれより外には出來やうもなかつたのだ。

◎清盛の致し方は、決して衆心を收攬するとはなかつたのみならず、却て、凡てのものをして、彼を怨望せしめた。たゞ清盛の暴勢の爲めに、逆らひ得るものが無かつた丈けだ。もし重盛が生きてゐたならば、平家も中々根づよく朝廷の勢力となつたかもしれぬが、宗盛では、迚も衆の怨恨を制するとは出來ない。宗盛とても、強ちの愚物でもなかつたらうし、知盛のやうな、一門にては勝れたものもあつたれど、危機既

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に清盛が時代に熱し、重盛の死んだので、いよ〳〵破裂すべき勢となつた。重盛もしあらば、源氏と雖も、なか〳〵に京都までは勢力を張れなかつたかもしれぬ。重盛死して日ならず、東西の源氏並び起つたを見ると、どうしても重盛に勢力の大なものがあつたものであらう。

◎頼朝が根據を鎌倉に据ゑて、平家の征伐には、兄弟を用ゐて、決して親ら出馬しなかつたのは、大江廣元の如き智者を延いて、覇業を固むるに心を碎いて、そして、武勇一點張の武者共は、皆戰爭に出して仕舞ひ、左右には政治家をあつめ、參謀となし、坐して天下を制し、兩がら功を收めたのである。その力量は實にすざましい。素より猜疑心は深かつたが、政略にも富んで居たから、梶原景時の如き、うるさい人物は、義經に附けて置いて、彼をして矜らしめぬやうにしたのであらう。業成りて後も、京都に參內した事は、僅に一度か二度で、虛位は受けると直ちに之を辭して、實利を收めた。もし頼朝が勢に乘り過ぎて、京都に出て、直に平家に代つたなら、覇業などは決して立たなかつたのである。義經を伐つとて珍しく奥州へ行つたのは、これまた人心收攬の爲だ。

文藝

實朝の和歌

（金槐和歌集を讀む）

鎌倉の覇府に、三代の將軍として、不幸薄命の世を了へたりける源實朝は、後世の史家、或は稱するに、優柔紈袴兒の蔑辭を以てすと雖も、彼が歌人としての詩腸は、千載に鼓吹するに足るものありて、苟くも、小倉百人一首を唱して、

世の中は常にもがもななぎさこぐ
　海士の小舟のつなでかなしも

の詠を知るものは、鎌倉右大臣としての、實朝の歌名を記せざるはなし。

清和源氏の流、久しきに亘りて、名將英雄輩出したるが中にも、亦二人の歌仙を生みたるとを記臆せずんばあらず。其一人は彼頼政にして、他の一人は即ち此實朝なり。而して彼此共に源家の衰亡時に出でたることぞ、偶然の配合なれ。頼政

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

が、一門中興の前に不遇の身を嘆じて、

我れが身や古河水のうす氷
むかしは清きながれなれども

と嘆じつゝ、僅に鬱懷を花月の唫咏に慰めたる、はたこの實朝が、源家の正統、將に已に絶えなんとするも、術の施すべきなく、やうやく卓抜せる歌才を琢磨して、名譽を後代に遺せる、思ひやれば、いとゞ哀れのことなりき。

賴政の歌才に就いては、曾て之を論じたり、而して之を實朝に比するに、無乃、其優れることを後者に於て見る。賴政またこれ當年の名匠なりしと雖も、なほ新古今時代の調を失はず、然るに實朝に至りては、其初め藤原定家を師として、其時代の調を學びたりと雖も、其歌才は、爰に滿足すること能はず、眼を、古今以前に注ぎて、萬葉の高古なる邊に、やゝ會得する所ありき。實朝を崇拜すること最も甚しきものは、縣居の翁なり。眞淵曾て曰く、

鎌倉の大臣の歌は、今の京このかたの一人なり。その體、古へにかなひたれば、たま〳〵古今歌集の言をまじへ用ゐ給ひしすら、似つかず聞ゆるにつけて、本の心も調も勝れて高き事しられたり。

といひ、また、或る時は、

此大まへち君の詠みで給へる歌こそ、奧山の谷の岩垣ふみはらゝかし出て、大空にかける龍の如く勢ありて、大野らや草木もゝろむけ、八重たつ雲霧を拂ふ風の如く、ひたふるにして、いかくをゝしく、みやびたる古への姿に返り給へりけれ。

といへり。眞淵は國學の復古を唱へし餘り、和歌に於て、萬葉の古調に心醉せるに似て、爲めに、實朝を賞讃すること、度に過ぎたるものあり。されば、香川景樹は、之を難じて、

鎌倉の右府の歌は、志氣ある人、決して見るべきに非ず、況んや之に倣ふべけんや。……右府の歌の如く、悉く古調を蹈襲め、古言を割裂たらんには、後より之を見んに、或人は藤原平城の上つ世に似たりと貴み、或人は情を狂り世を欺くの作なりと卑むべし。其卑まんは、さてありなん、其貴むに至りては、害、勝げていふべからず。

と。此言や、酷に過ぎたるものあり、景樹の意は、蓋し、實朝の歌才を沒せんとするに非ずして、眞淵が古調心醉の弊を

難ぜんとせしにてあるべし。實朝が、古調を學ぶの弊、蹈襲割裂に終るものなきに非ずと雖も、彼はなほ、稀有の歌才なり。左の數首の如きは、敷島の道の壞びざる限りは、絕唱するに堪へたるものといふべく、眞淵の如きもこれ等を見て、彼を崇拜するの念を高めたるものと思はるゝなり。

箱根路を吾こえ來れば伊豆の海や
　沖の小島になみのよる見ゆ

武夫の矢なみつくらふ小手の上に
　あられたばしるなすのしの原

山はさけ海はあせなん世なりとも
　君に二心われあらめやも

このねぬる朝けの風にかほるなり
　軒ばの梅の春の初花

玉もかる井手のしがらみ春かけて
　咲けや河べの山吹の花

たれすみて誰ながむらんふるさとの
　吉野の宮の春の夜の月

吹風の涼しくもあるかおのづから
　山の蟬なきて秋は來にけり

夕ざれば衣手さむしたかまどの
　尾上のみやの秋のはつかぜ

秋風に夜のふけゆけば久方の
　天の川原に月かたぶきぬ

雁なきて秋風さむくなりにけり
　ひとりやねなむ夜の衣うすし

雲のゐる梢はるかに霧こめて
　たかしの山に鹿ぞなくなる

ときによりすぐれば民のなげきなり
　八大龍王雨やめたまへ

しほがまの浦ふく風に秋たけて
　まがきが島につきかたぶきぬ

月見ればころも手さぶしさらしなや
　をばすてやまの峰の秋風

月きよみさよふけゆけば伊せじまや
　いちしの浦の千鳥なくなり

こぬ人をかならずまつとなけれども

わかつき方になりやしぬらん

雁がねのかへるつばさにかをるなり
　花をうらむる春の山かぜ

或は雄壯、或は高雅、或は優麗、皆共に唱すべきの秀歌ならずや。擧げたるが中には、眞淵の如きは、古へぶりならずとて、流石よしとみつゝも、讃えぬもあれども、何ぞたゞに調の古今をのみ問ふとを要せんや、優れたるものは、何の世までも賞むべきものなり。景樹と雖とも、此等の歌を唱して、我未だ及ばすと嘆ぜしならん。

されど吾人は實朝の和歌に服する所多しと雖も、眞淵の如くに彼を崇拜すると能はず。翁は、實朝を以て、古今以後一人と稱すと雖も、其西行等に及ばざるや遙かにして、熟ら金槐集を味ふに當りて、彼は遙に凡流以上に在りと雖も、其詩想は、高踏なるを以て稱すべからざるを知る。其万葉古今調に摸倣するもの多きとは、景樹の非難を免れざるべく、而して以上列擧したる數首に就いても推せらるゝが如くに、同調なるもの多く而も其調、多くは古人によるを見ても、藻思の狹小なりしを知る。由來實朝、才智に長けたりけん、才智深きものなくんば、如何ぞ彼が如くに、巧みに古調を模倣するを得んや。然れども、彼に在りては、高遠なる理想を欠きたるが如し。ことに宗教思想に闕如たりしが如し。彼も亦、他の歌人の如くに、釋教の詠ありと雖も、

大日の種子より出てさまやぎやう
　さまやぎやうまた尊形となる

世中は鏡にうつる影にあれや
　有にもあらずなきにもあらず

などいへる類のものにして、たゞ佛語を詠み延びたるに過ぎずして、いづれも集中の歌屑なり。其他の詠と雖も、集中、此人が高遠幽妙の理想を伺ふに足るもの稀れなり。されば、彼は畢竟、多くの歌人の如くに、巧みに花月の詠をなすに志して、其才能よく卓出するに至りしものか。されど彼の死は僅に二十八歳の時なれば、理想の淺厚の如き、强ちに之を論ずるは酷なり。彼の成果は以て第一流歌人の列を去ると遠しと雖も、年少にして既によく古人を壓するに足らんばかりの名歌をあまた遺したるの功は、永へに讃稱すべく、彼はまた非凡の一歌才なりしなり。

二〇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

随感

南遊行（二）

○宛然同様の内地

曩に北海道に遊びては、風景の内地と相異るとの太甚しきに驚ろき、今は台灣に來りて其の餘りに内地と酷似するに驚ろく。基隆より台北に走るの車窓を開けば、山峯起伏のさま、高低すべて内地の山に似たり、田圃區畫の躰裁、狹く小さき趣むきは内地の農作と異らず。竹やぶの一むら二むら彼方此方に茂り、牛を驅つて鋤犂を反へすの農夫蓋し我が日本人と思ひきや、惣べて支那人なり。家鴨田の水に泳ぎ、豕の子、畠の畦に戯ぶれ、山腹に植えたる茶の樹に培ふものあり、笠の内を窺がへば、皆な支那人なり。水車を踏みて、田に水を汲上るものあり、二人三人談笑しつゝ此方を見る、彼こそ吾が同胞ならめと思ふにこれも亦た支那人なりき。嗚呼、風景、農事、悉皆、内地と異ならずして、但只だ其人を異にす。而して、此の人も亦た異國人にはあらず、今は是れ實に新日本の同胞となれり。

○風光明媚の高砂島

台灣新たに皇帝の御領に入る。惟ふに是れ眞に天與と謂ひつべし。もし一と度び天形山水の姿に因縁して、此の美なる一島の何れの國に屬すべきかを考ふるものあらば、黄塵白泥の支那は所詮其の母國にあらず。昔し、スペイン人をして La Farmosa と賛歎せしめたる此の美くしき高砂島は、必らずや風光明媚の日本島と一連續すべき所以を悟らん。夫れ人爲の染習は、激にして而も深からず、自然の因循たる感化は、微なるが如くして而も反つて宏遠なり。われ惟ふに、台灣島内の鮮潔淡麗なる風光が、日本的人爲の多少の染習と同もに相待ちて感化するの深酷なるや、かの幾多歸來せる秦人、明人を化して遂に純乎たる日本人とならしめたる昔日の實歴と相似んと遠からじと。論者須からく急促の杞憂を去るべし。たとひ暫らく放任すとも、天然に日本的たる此の風光は、遂に支那人をして識らず知らず帝の則に薫化せしめんと必定せり

と。

○支那人の勤勉

台北に到れる即日、艋舺を巡覽す。艋舺は支那人の日影町、其の尤も醜、尤も雜劇なる所なり。道路三尺、溝泥腐水充溢し、一臭氣鼻を衝く。而して、往來の人肩を摩り、奇聲、異音、前後にあり。われ、其の大路小徑を周覽して喟然として歎ずらく、あゝ日本渡來の人、久しからずして此の土人の隷屬たらんのみ、何んぞ其の勤勉にして彼の怠慢なるやと。大凡そ艋舺街内、戸々の家、人々の手、一秒一刻も休息することなし。老いたるは六七十より、少きは六七才に至るまで、銘々一個の職業に忙はしからざるはなし。偶ま某の家に入りて筆談す。聞く某は六万兩の財産ありと、而して其子十八九才の青年は、亞片製藥所に通勤して月給七圓を頂戴すと云へり。惣じて彼等は、月二三圓の生計費によりて維持し、其他一切を貯蓄する也。其の貯蓄一万圓にして初めて二三千圓の商資を卸す。未だ嘗て無理算段の山師事を爲さゞるが故に、嘗て違約することなく、又產を破ることも稀れなり。持てる者は益す與へられ

て彌よ富み、數代、數十代を經えて、遂に驚ろくべき金傑となる。其の遠大にして持重なる眞に驚ろくべし。彼の街上に侮蔑せらるゝ苦力と稱ふ立ん坊すら、日に五六十錢以上一圓を收入して、而も生計費、日に五錢に過ぎず、他一切を貯蓄し、其の懷中常に六七十圓の銀貨を藏す。左れど彼等は只だ吝なるのみにあらざる也、其の神佛の事に義捐するに至ては頗ぶる大量なり。彼等の中、基督教を信ずる者の如きは、一時に八九圓の銀貨を其破れたる懷中より喜捨することありと聞けり。而して、艋舺街中、所々にある妓樓、密賣淫の主人は何人ぞと問ふべし、すべて日本人なり。其の店頭にブラリブラリ遊びて、他の拮据勤勉寸刻だに相爭はんとする支那人に似ざるは何人ぞと問ふべし、すべて日本人なり。支那婦人の醜業者をすら雇ひて新たに妓樓を公設せしものは、何人ぞと問へ、すべて日本人なり。

○牛車の悲しき音

新竹に遊ぶとき、初めて篭に乘る。長竿二本、長さ各二間、神輿に似たらん篭籠を載せて、苦力三人肩にして擔ふ。搖動

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

法あり、快意なきに非ず。吾はゆられ乍ら窓より眺むるとき、宛然、李鴻章となれりし心地す。行きて、河水あり、膝を沒す。苦力等毫も意とせず、籌を捧げて渡る。此時、前方、牛車五六輛來る。牛車は、牛三頭乃至五頭をもて大輪の車を牽かせ、重きを遠きに運ぶもの也。其のゆくとき、轣轆として響あり。異樣の調を發して一種の律呂を爲す、遠く聞けば泣くが如く、訴ふるが如し。そゞろに游子孤客の涙を催ふす。吾ひとり膝を抱きて長嘯し、東西千古の史人を懷ふ。嗚呼、此の聲を聞きて恨思せしもの古來幾人ぞと。

○榕樹傘覆の下

新竹に來るあけの日、舊港に魚獵す。風波あり、獲物なし。土人遺憾とし、心をこめて馳走す。榕樹の下、一卓あり、卓を圍みて人々飮食すれば、雨滴時あつてか枝を傳はつて落ち、卓上に散る。犬豕、來りて卓下に集まる。別に邦語を解する水生なるものあり、能く談ず。白禽一長列、翼を飜へして水上をかするを見る、曰く何の鳥ぞ、答へて曰く、海鳥と。船、風に搖く、曰く何とか稱す、曰く苦船と遠く棵葉樹のさびしげに立てるあり、近く見る相思樹の葉々濃やかなるを。吾れ密かに長恨し、多情禁じがたきものあり。

○臺灣女學の曙

八芝蘭は是れ國語學校の初めて設けられし地、六氏殉難の遺跡なり。之にそひて士林街あり、今ま附屬校として女子部置かれ、土人の歸女子近ごろ初めて來り學ぶ。年長けたるは、齡三十前後、皆な人の妻なり。時に梅花の簪をつくる。中に就きて、一婦人は其子を携へて來り學べり。花を造る手の下より、かの若兒は、母の乳房にすがりつゝありき。之を聞く、敎師某、男生某の家を訪れしとき、男子家にあらざりしか、其妻、左手に兒を抱きて乳を含ませつゝ、右手に其日學校にて學びしものゝ筆記文を寫しつゝありしと。現時、臺灣に於ける女子敎育の曙光すでに斯の如し。

○淺ましきは人の相擊つなり

各停車場必らず數箇の支那人あり、純然たる洋服紳士、正にこれ鐵道掛りなり。淡水停車場に車に上れる時、ふと、日本

の役吏と、支那人の火夫と相闘ひ烈しく打つを見る。衆皆らく放擲して圍みて見る、蓋し屢ば斯ることのあればなるべし。支那人は幾度か蹴らんとし、日本人は幾度か髪を引んとす。遂に烈火の如く相激する時、人やうやく引分けたるに、二人毫も互ひに屈せず、就中、支那人の憤怒特に烈しきを見たり。彼は遂に翻然として何處にか出でゆきし也。嗚呼、噫、彼等の相闘ふ、日々所々に斯の如し、而して、支那人を侮蔑し、支那人の之に屈せざる亦やうやく斯の如し。抑も、人間の相争ひ、相撃つの様を見たる時ほど、あさましきはなし。車中數行の涙禁じあへず。同胞相愛するの日夫れ何の時ぞと思はれ、空しく皇天を仰ぐ。

〇土人の教會

臺北艋舺にある土人の教會に、宣教師マツケー氏來り宿すと聞ける夜、ゆきて訪ふ。マツケー氏はカナダの人なり、其の秘書たる如き土人よく英語を談ず。土人の牧師は支那人なり、其妻は熟蕃なり。暗室の前、孤燈煙に黒き小庭の内に、相對して話す。懇然として互ひに一和するものは、主の御名を一

つにすればなり。同じく是れ支那人と言へど、何ぞ其風望の氣高くして眞實なるや。マツケー氏時に亦た土語を談ずれば、其調毫しくも洋人に似ず。熟蕃出生ときける牧師の夫人は、莞爾として微笑し、貞淑に傍聽す。此夜、不平を洗ひ盡して悶思を快くす、感謝して靈交の樂しきを愛す。

〇南荒の撫墾

つく〴〵南荒の風土民情を視つゝ、或日深く感激して、口づから語を爲せるものは、輒ちこれ也、曰く、

人生百般の俗務を慮はかりて、終に道徳に念じ及ぼさゞる者は、其人必らずや高遠にあらず。既に道徳に念じ及びて而して理財經營に心を勞せざる者は、其人必らずや迂にして拙と。

新玉の春たちかへるあしたより
またるゝものは鶯のこゑ　　素性

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜　録

遊感隨筆

左の一文は臺灣日報の掲載せしもの也。

◎臺灣の一部分を瞥見した丈では、無論、全躰に關る意見の有る筈は無い。然し瞥見したる時の隨感は一種の直覺なれば、必らずしも棄つべきものではあるまい。湖南詞兄のお要めもあるに付、隨筆して大方の笑覽を乞ふべし。

◎臺灣に來つて第一に到着したは、基隆であるが、昔し日本人が占領した由縁のモトタカの字は遣つても、あまりに支那風なのに驚歎して、身は宛ら文人畫中にあるかと思つた。其の長廊高閣は如何にも畫圖の如くであるが、翻つてシャンパンを艀の間に割込み客のコボレを拾ふ支那人の悪度胸を見れば、支那人の如何にも悠長なる所と、如何にも狡猾なる所との兩面が直ちに分つた。

◎汽車の窓から風景に應接して、之は亦た餘りに日本風に驚ろいた。山の摸樣、田畠の區畫、竹林の一叢又一叢、水牛を追つて鋤犂を反す農夫の樣姿に至る迄、殆んど内地と同じである。所謂るフォルモサの美島は、自然の連續に於て日本の範圍に入る可きものと見える。一望千里の大陸的風光とは本來、趣きを異にする場所ゆゑ、其住民が久しからずして島國民となり、遂に日本化するに至るは明白である。必らずしも、人爲上の小策を算するに及ばず、古來幾十万の歸化人が知らざる間に日本人と爲り遂せた如く、現在の支那人が遂に母國の大陸風を失ふに至るは明白である。徒らに反動を起させぬやうにして自然界の感化に委ね置かば、彼等も到底藥籠中のものである。

◎日本の女は領事が行かぬ先に遠征するが、支那の男は、其政府の來らぬ前に既に台灣を占領したらしい。生蕃と中の悪るいは、之を追詰めたる證據であるが、其の生蕃の未だ元氣勃々たる所をアイヌの從順なるに較べて考へると、追詰め方も烈しかつた故であらうが、生蕃の數もまだ中々多いと見える。然るに、支那人が鐵砲を持ち乍ら耕作すると云ふ氣力に至つては實に賴母しいとで、帝國の政略は、彼等をして十分

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に勉強せしめ、其の苦力によつて遺利を開發せしむるに如くはない。彼等をして富ましむるは即ち日本の益である。彼等をして安んじて土着せしめ、其の根を本島から動かさぬやうにさせたい。富人が本島に安堵さへすれば、即ち本島は自然に開ける筈で、開けさへすれば帝國の益である。

◎南が開けて后に北は開けるもので、狹い一地方に家の建つ工合を考へても其法則は直に分る。臺灣が帝の御領に入つてからは、北海道の人氣が減り、追々南へ〳〵と來るものが多いが、迚も支那人と競爭の出來るものでない。遠からず、逃げて歸るに相違ない。百姓にせよ、商買にせよ、どうして支那人と競爭の出來る筈はない。夫故、幸ひの事ゆゑ、此の支那人を日本人になし、此上、追々支那人を入れて、彼等の手を以て本島を開かせたい。只だ、結局の所は、本島の富は知れたものゆゑ、大きくなると支那の方へ歸つて行くかも知れぬ。夫れを成る丈け、大きなもののあちらに歸らぬやうにするが、政治上の一伎倆である。

◎生蕃の開導に撫墾の所置を用ゆるは、劉銘傳も既に失敗した方法なるよし。然し、人を善撰して之に當つれは必らず功の擧るに相違ないが、別に交易を盛んにして彼等の生計上の樂しみを増させ、自然に奢らせて之を文明に導くの方法もありたいものと考へる。又、盛んに宗敎家を任用し、其中に飛込ましむれば、久しい中には必らず成功する。然し何れにせよ性急にするほど詰らぬとは無い。多く人命を損し、多く錢を使ひ、其上、氣を落し、遂に絶望するのみである。

◎一體、支那人の悠長にして遠大なる所は、日本人に取ての短所であらう。韓信の股をくゞるなどは、日本でこそ評判であるが、支那人本來の氣質からは珍らしくない。張良も一度は客氣を出したが、直に悟つて靴を取つた。其邊の敎訓の爲めに二幅對の逸話を歴史に書いて、到底は矢張り、蕭何の經濟が第一の功を立てた。我國でも、昔しは中々の大規摸で、ドシ〳〵海外の寶を取りにかゝつた。北條氏などは、坊さんを召よせて、參詣人はこちらに引つけた程だ。足利氏にしても、金閣寺銀閣寺を建てた程で、大閤に至つては、出かけて迄で、金銀を取つて仕舞つた。獨り德川家康の大經綸の中に丸められて、對外思想を頑固にし、近時の日本人は動ともすれば狹隘なる國家主義の名に溺れて仕舞ふ。斯まで重寶なる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

支那人の働き手を吾國領に譲り受け乍ら、之を働らかせて富を起させぬと云ふ道理はない。又左樣に早く之を日本化させいで宜しい。見るべし、天然の感化が久しい內に自からにして之を化するです。

◎世界中、尤とも平民的で、尤とも自治なるは支那人なるべし。支那人に取ては、政治と社會とは丸で別ものである。其政治を見て、其社會を推すとは中々困難である。其政治は、亂雜で、不信義で、墮落して居ても、社會は決して左樣でない。支那人の心では、餘り政治には頓着せぬ。また頓着せずに濟むので、學者は只だ國家の裝飾品たる所以をよく心得て、之に政治を任せ、名譽を與へ、勝手に振舞はさせ、相應に年貢を出して置く丈けの事で、彼等が眞實の眼中には、一種の遊民と見て居る。夫故、政治上の經綸で社會を進めるなどは毫も思はない。其の理想の政治は堯舜の政治で、即ち役所は藁葺の低い家で、入費も掛らず、お世話の面倒もなく、帝徳何かあらんと謳ふ所にある。其次は、收斂の臣なきと、役人の私せぬ位に止まつて居る。兵隊が生命を棄てゝ國を守るなどとは、餘り考へ付かぬ所で、聞ても左程感心もすまい。

先づ錢を出し合つて番をさせ、吾が富を保護する丈の經驗より外にない。夫故、彼等の談話にも、新聞紙にも、內閣の交迭などを氣にするものはない。日本では、藩々の頃、役は家に附たもので、其の交迭などには餘り慣れぬ遺傳で、今日世人の話しと言へば、政府の動搖を氣にするより外は無い。支那人などには、此邊の心配は頓とないもので、誰が役人になつても構はぬ、程よく之が氣に入つて稅を餘計に取られまいと言ふ丈に過ぬが。抑も、日本政府の規律で、收稅法は一定して居ると分つたらば、大に安心もしようし、安心すると同時にあまり御氣嫌も取らなくなるに相違ない。近頃、支那人が或人と筆談して、臺灣固と高砂島と稱し、一旦貴國人の手に入りし所ゆゑ、今日再び屬國となるは先例あり、故に如く從順いたすのであると言つたさうなが、大抵此の筆法で眞に如才ないものである。彼等に施す政治を、日本の藩に慣れた眼で見ては、大變の相違である。惟ふに、支那人の具眼者からして、日本人が政治に狂する工合を見たら、さぞ不思議にもあり、可笑しくもあり、馬鹿らしくもあり、抑も何等の實益あつて、あのやうに政治を大切にするとかと不審に思ふで

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

あらうと信ずる。

◎其の教育は職業教育の外容易に行はれもすまいが、職業教育ならば、行はるるとは少しも骨は折れぬ。今日では、日本語の教授を受けて早く役人になりたいから、國語學校に入る丈りの事で、其外に目的は無い。追々は、判任試験科目の教授などを入れゝば續々入學するであらう。之はつまり月謝を取ても宜しい、自分で金が無くば、金もちが貸すに相違ない。之は職業教育である。然し、其の普通教育としては、七八歳以上十一二歳迄を、日に二時間位、無月謝にして、悉皆入學せしめ、第一に日本語、其他は極めて簡易なる理化と日本地理歷史とを教へ、全島劃一に普く行ひたいとである。

◎女子の普通教育を普く行ふいは、あまり急いでは反つて宜しくない。又、其の暗室から無暗に外に出るやうに促すとも急にしては良くない。段々と男の教育の方針に伴ふやうにせねば成らぬが、畢竟は、手藝的教育より導びき、戸々に於て手細工をする大方針に案内するが當然と信ぜられる。

◎彼等の宗教觀念は存外猛烈である。殆んど迷信するほどである。收入の五分の一は宗教上に使ふと言つて宜しいほどである。クヮーでさへ基督教を信じて一時に八九圓宛義捐するものがあると聞く。輕薄なる皮想文明的教育によりて此の宗教觀念を毀たぬやうにしたい。徐々に導きて其の宗教觀念を開化せしむるとは必要であるが、之を破つて懷疑無宗教に陷らしめぬやうにしたい。左もなくば、恐ろしい大害を釀すとがあるに相違ない。

鬼夫婦

山月子

●鬼といふ者、元來有るに非ず、故に眞實之を見たりといふ者なし。然れども古來の文により、又は畫によりて之を見るに、鬼に大鬼あり、小鬼あり、靑鬼あり、赤鬼あり、馬首なる者あり、牛頭なる者あり、其類も亦多し、而して鬼といへば、重もに殘忍酷虐を意味し、或は勇猛無比を意味す。今吾人が記せんと欲する鬼夫婦は、如何なる意味に於ての鬼か、甲か、將た乙か。人皇第百七代後水尾天皇の御世、德川三代將軍家光の時、奥州仙臺の藩主伊達政宗の臣下に、井伊直人といふ

者あり。其家代々劔術指南番として、祿五百石を領す。直人年少にして父母を喪ふ、性質磊落眞率、甚だ武藝に疎なり、平素遊惰放蕩、殊に賭博を嗜む。之を以て家道日に衰へ、僕婢悉く離散し、殘る者僅かに一僕のみ、而して直人の放逸益益甚し。時に同藩の士に、砂子三十郎あり、三千石を領し、家頗る富む、女あり、名を貞といふ、芳紀二九、容顏美麗、文に通じ、武に達す、父母掌中の玉と愛で、婿選びして未だ嫁がず。既にして父は彼の放蕩無頼、人の唾して顧みざる井伊を以て、これこそ我が愛孃を與ふべき人物なれと思ひ、孃は心より父の命に從ひて、三百兩の持參金と共に、貧困なる直人の家に歸ぎぬ。諸人其意を解せず、怪みて語り合ふ者多かりしといふ。

新婦は新郎に事ふると、其主に仕ふるが如く、伉儷のかたらひ濃かなりしが、直人の惡習は再び萠し、金を持ち出して賭博に耽り、家に歸らざると屢、遂には妻の衣類を賣り、其髮の飾を賣り、更に其實家よりして金を借らしめ、返さずして借り、借りて費し、費して又借る。此の如くして一年を過ぎ夫婦は共に着換の衣だになくなりぬ。而して柔和貞順なる妻

は、一度も惡しき顏色を以て夫に對せざりき。

一日、妻の母來る、直人其睡を伺ひ、衣類を持出して之を賣る、母歸りて其夫三十郎に向ひ、具さに婿の亡狀を訴へ、斯の如き者よりして、最愛の娘を離緣せんとを勸む。三十郎は平然として答へていふ、棄て置きて可なり、彼れ若年にして素行修まらずと雖も、我別に見る所あり、彼は後に必ず英物とならんと。

直人の行は未だ修らず、例の如く妻を一室に招き、命ずるに、實家より五十兩借るとを以てす。妻曰く、そは易き御用なり、然れども良人の御身は如何なる役を務め給ふぞ、曰く、もとより武藝指南番なり、何の必要ありてか改めて問ふ。曰く、良人には何時武藝の御指南をなされしぞ、妾當家に來りてより一年有餘、而も未だ一度も良人の武藝を見ず、かくて猶武士道立つと思ひ給ふか、草葉の蔭の御兩親も歎かせ給ふならんと思へば、妾は實に面目なく、殊に家中の人々なんどに、嘲り笑はるゝならんと思へば、女心にも殘念止み難なしと、直人此に至り、怒を發して曰く、默せよ、汝女の分際にて何を心得居るや、貞女靜かに答へて曰ふ、女なれども、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

武士の家に育ちし者、薙刀の一手位は嗜みあり、御好みなれば御對手になるも苦しからず。曰く、然らば來れ。曰く、妾が若し負けたらん時は、如何にもして金を調へ參るべし、良人若し負け給ふ時は如何し給ふぞ。曰く、汝が申す通りにせん。曰く、然らば其時は、直に武藝修業に出で、從來の汚名を雪がせ給へ、武士に二言なしとぞ承る、御兩親にも御上覽遊ばせと、佛壇よりして位牌を取出し、襷、鉢巻して薙刀手に取り、庭に下り立ちたり。直人は木劍を取りて迎へ合はす、一上一下、一往一來、貞女の薙刀電の如く動くかと見れば、直人が木劍は空に飛びぬ。再び瞬きすれば、夫は倒れて妻の薙刀に押へらる。

かねての約束、如何ともすべからず、妾が腕に立ち勝り給ふに非ずんば、誓て當家に入れ申すまじとの言を耳にをさめ、十兩の路費を受け取り、三年間の暇を伊達家に請ひ、江戸に出でゝ、當時將軍家の御指南番として、武藝神妙、柳生の天狗と呼ばるゝ飛彈守宗冬の邸に至り、刻苦勵精、朝より夜に至るもの三年、頗る妙を得て歸る。

家に入り、妻を呼びて足を洗はんとす、妻直に諾かず、庭前に出でゝ勝負の後、勝たば則ち入り給ふべし、勝たずんば則ち入り給ふべからずといふ。直人怒り、三年以前に異れる柳生家修業の手錬を見せんといひ、直に庭に赴く。何ぞ知らんや、貞女も亦三年間の修業苦錬實に甚しきものありしを。奮戰激鬪、又も勝利は妻に歸しぬ。色を正して夫に向ひ、如何にこれにても柳生の御家の御修行と仰せらるゝか、餘りといへば情けなし、かねての御約束、今一度御修行遊ばせといひ、旅費二十五兩を出す。曰く、恐れ入たり、我れ三年目にして歸る、道中の疲勞も亦甚し、枉げて今夜の一泊を許せ。曰く、否其事叶ひ難し、直に出で立ち給へ、妻に打ち負け、何の面目ありてか世人に見え給はんと。嗚呼何ぞ其心強きや、曩には春風駘蕩、楊柳嫋々、今は秋風蕭殺、嚴霜烈々、曩には唯命是れ順ふ、今は一歩も讓るとなし、何ぞ其別人の如くなるや。怪むと勿れ、眞正の愛は、或は發して柔となり、或は出でゝ剛となる。

更に三年間の暇を追願して、直人は再び江戸に出でぬ。柳生宗冬嘆じて曰く、天晴れなる賢婦、世に珍らしき事なりと。師弟共に相勵みて敎授し、井伊は二年にして其蘊奥に熟達し、再

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ひ歸りて妻と庭前に立ち合ふ、一方に龍の威あれば、一方に虎の勢あり、勇を奮ひ力を盡して戰ふと一時許、漸く夫の勝利となる。時に妻は自ら夫の足を洗ひ、手を取て上坐に導き、遙かに下り拜して曰く、久しき間、心にもなき無禮を致せしこと、皆是れ御家の爲を思ふてなり、願くは宥させ給へと。

直人は此に至り夢の覺めたるが如く、貞女の手を取りおし頂きて、嗚呼我に若し汝なかりせば、生涯必ず他人の嘲笑する所とならん、たゞ汝の勸めによりて憤發し、漸く父祖の家名を汚さゞるを得たり、誠に亡き父母の汝に乘り移りて御敎訓を賜はりしものか、忝けなしと喜び謝し、乃ち伊達家及び重役に歸國の屆をなす。政宗之を聞き、夫婦を招きて親しく其勝負を見、深く之を賞して祿三百石を加増す。一家中遂に此二人を呼びて鬼夫婦といふ。

所謂寛永の御前試合に於ては、召し出されて、彼の鎖鎌に於て日本隨一の名ある山田眞龍軒と立ち合ひ、井伊は遂に之に負けたるも、政宗の望により、妻貞出でて之に打ち勝ち、大に將軍家光の賞詞を得、鬼夫婦の名は、益々日本全國に轟けり。鬼とは勇猛無比の意味にてあるなり、若し夫れ彼女の眞愛、柔順、貞淑、賢明に至りては、何の辭を以てか之を賞せん。

嗚呼井伊素より凡人に非ず、貞女誠に凡婦に非ず、而して砂子亦眞に凡眼に非るなり、三美三絕、一番の名花となる。

海舟先生詠草

月すみて梅かをる夜は大江戸の
　おぼろのちりのあとだにもなし

夜ひかる玉にたぐへむ梅の花
　あやなきやみも香やはかくるゝ

あながちにいとふにあらでちりもなし
　さきいでそめし梅のはつ花

たきそふる眞柴は夜半のふすまにて
　夢おどろかす雪折のこゑ

あまざかるひなにさくともやまざくら
　雲井もおなじいろかなるらむ

時　文

◎袖珍作文寶典　大和田建樹著　　博文館版

大和田建樹氏が國文を習ふものゝ爲めに、簡明と輕便とを兼れ、俗に流れざるを目的として編述せられたるものにして、其、文法、美文學、散文作法、同作例、書簡文作法、同作例、新體詩作法などを纂述せるを、いづれも初學者の益をなすこと多きものといふべし。

◎加茂眞淵翁全集　上卷　　同

博文館の日本文學全書並に日本歌學全書等の出版が、我文學界を利したるは、極めて宏大なるものあり。而して以上の二書は、採收する處悉く中古以前に亘りて、其近代ここに德川氏時代に及ばざりしを遺憾とせしに、こゝに又續日本歌學全書出版の擧ありて、國學復古以後の諸名家の歌文共に之を網羅せんとす。其第一卷眞淵翁全集上卷收むる處、長流、契冲、春滿、眞淵の家集等をはじめ、國歌八論及之に對する諸家の議論をも收む。編者の意、蓋し、眞淵、宣長、景樹の如き大星の下に、同系統の星辰を糾合するが故に、某全集の名や、不似合はし。さりながら此續歌學全書の一編ごとに、學者を益すること、甚だ大なるものありといふべし。

◎實驗上の宗教　川崎巳之太郎編述　　警醒社版

まことによく宗教の眞味を知らんと欲すれば、自ら之を實驗し、また人の實驗を聞くを以て第一の要となす。此書は我國當今基督教界の名士十數人が、種々の境遇の試鍊の下に、如何にして其信仰を養ひたるかとの、各自の談話を收錄せるものにして、宗教に志すもの、一讀すべきの書なり。

◎皇朝婦女鑑（一）　磯野德文編　　國光社版

皇朝古來名婦多し。此書は、上は神代の昔より、人皇四十一代持統天皇の御宇に至るまで、史上に散見せる、凡てのいみじき婦女に就きての小話を收めたり。なほ續篇の出版されて世の模範とすべき皇國の婦女を網羅するものゝよし。有益なる書といふべし。

◎新小說　第十三卷　　春陽堂版

淼無邪の「戀の水」てふ失戀物語、水蔭の「鐙流し」といふ、舞臺を北條氏滅亡時代にとり、同氏の臣長崎勘解由左衛門爲基を主人公となしたる時代小說を載す、雜錄の濱伴子に成りたると覺ぼしき隨感小文數節はいと面白し。時報は近頃、忍月子に成れりとかや、以前にまして見るべきものとなれり。

◎日の出島　住の江の卷
◎鐙の風　　弦齋作　　同　版
◎風船緣

日の出島は、いよ〳〵出でゝいよ〳〵長く、鐙の風は、宗義秀が、秀吉の征伐に先だちて、朝鮮國に間者に入りたるとより、征伐中の事柄、中にもまた玉蘭女の艷な話などあり、總するに、こは國性爺合戰に酷似せる書かたなり。風船緣は、工學士連が熱海より上げたる風船が緣となりて、佳人を得る話。三書共に正月、婦女の讀物として、好適せらるゝなるべし。弦齋子の如何に江湖に評判よきかは この春の賣初に一時に三書も出版せられしを以て見るべし。

◎新小說　第三年第一卷　　春陽堂版

此卷載する處、柳浪の「女仕入」十五回に亘るの長篇、柳浪子新作續々として出づ。其健擧や驚くべし。其外露伴の「仇し名」眉山人の「當座帳」、紅葉の「手引の糸」、無名氏の「欠伸達磨」あり　忍月子の「時報」欄、觀察諸種の方面に亘りて面白し。忍月子や前年の批評界に於けるの腕前を、一層磨き直して出陣せるものか。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎もしほ草紙　櫻痴居士著　同　版

これは櫻痴居士が、明治二十一年中、東京日々新聞の主筆を辭して後、同新聞に掲載し、また一冊に纏まりて出版せられて、其頃評判高かりしものゝ、再版せられしものなり。居士自ら曰く、今日之を讀閲して恰も他人の著書に對するの思ひをなすと、さもありなん。

◎新著月刊　第六年第一卷　東華堂版

柳浪の「羽ぬけ鳥」、青々園の「てまへ惚」、天外の「ひな歌」、抱月の「月暈日暈」、の四小說、逍遙の「神經性の二大別」てふ論文あり。時文評、文壇逸話、梨園談、走馬燈は編者頗る苦心せる處と見えて、いつもながら面白し。

◎お年玉　博文館版

少年世界、新年の臨時增刊にして、掲載諸篇はもとより、其體裁は、少年男女に贈るべき、この春のお年玉たるに適す。

◎女界文壇雜俎（本號〆切まで）

◎小學校高等科女教員の俸給(田中太郎)	統計集誌第百九十八號
◎初生兒の出產◎夫婦年齡の組合せ	同
◎外妾	反省の鏡第二年第十號
◎一夫一婦(貴衆兩院議員に告ぐ)	婦人新報第八號
◎理想的母(高杉榮次郎)	同
◎夫婦の道(豐崎尙亨)	同
◎女子家庭教育(三輪田眞佐子)	教育時論第四百五十八號
◎理想の婦人、女子の品位(高楠順次郎)	花の園生第八年第一號
◎婦女勞働の保護	社會雜誌第八號
◎福澤先生浮世談	時事新報一月五日以後
◎明治三十一年後の母(坂本三七郎)	女鑑第百四十八號
◎幼兒衞生の一節(三島通良)	太陽第四卷第一號
◎姑母と少婦と(敲玉女史)	同
◎紅葉山人の戀愛論、婦人論、夏妻論	新著月刊第二年第一卷

片々

◎福翁一夫一婦論に氣焔を吐く　頃日客あり、三田の先生を促して、其浮世談を聞く。翁は浮世の男女交際法即ち男子の不行狀、婦人の無勢力よりして遂に家道を紊亂するの事實を痛論したり。日本婦人の無勢力なるは、其教育の無きによるか、西洋婦人の有勢力なるは、其教育の多きによるか。教育の有無大に關係する處ありと雖も、こゝに一の看過すべからざることあり、即ち西洋は一夫一婦の國にして、日本は一夫多妻の國なり。日本婦人の無勢力なるも、第一に之に原因せり。女子教育を行はんといふよりも先づ、多妻法を打破せずんばあらず。かの醜業婦公行して、男子平氣に之を弄ぶ、國辱之に過ぎたるはなしなどゝ、翁や頗る氣焔を吐けり。

◎高等女學校設立の理由　富山縣會にて、議員某、番外に向つて、高等女學校新設の理由を質問せしに、書記官矢田部某、之に答へて曰く、之を設けざらんには內地雜居の時に至らば、縣下の女子、耶蘇學校に入學するの虞ありと。愚盲や笑ふべし。

◎全國小學校高等科女教員俸給　統計協會の田中太郎氏が明治二十八年現在全國小學校高等科女教員の俸給を調査したるものに就いて見るに、本科正教員俸給最多額は山梨和歌山の二十圓、同最寡額は石川、鳥取、廣島の五圓、同准教員俸給最多額は鹿兒島の十四圓、同最寡額は石川の三圓。專科正教員俸額最多額は靜岡の十二圓、同最寡額は千葉和歌山の二圓、同科准教員俸給最多額は、東京の九圓、同最寡額は三重、高知の一圓なり。なほ全國の平均をとれば本科正教員俸給は九圓四十六錢、同准教員は六圓九十二錢。專科正教員は六圓七十九錢、同准教員は四圓五十錢なりといふ。

◎老下婢當世の若奥樣を評して曰く今の若い奥さん位、いけないものはないよ、先づ理屈ばつかりが達者になつて、カラ實際の事は、メチヤ〳〵で解らず、マルデ口から先へ生れた人のやうに、能く上手にシヤベルけれども、身體はチツトモきかない。そして思ひやりが無くて、吝嗇で、其癖、大きい事に拔けて、氣が驕い。半片の豆腐や、一片の香の物は、やかましく云ふのに、掛取帳の附けかけには少しも氣がつかぬ云々と。

◎女子の執るべき男子の仕事　近着の獨字新聞に、同國に於て元來男子の仕事として、看做されたるものにして、近時女子の手にて行はるゝものゝ統計を掲げたり即ち、

烟突掃除三人◎家根葺三十五人◎蹄鐵及釘匠三百七十九人◎銃工七人◎鍛鐵及

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鑄鐵十九人◎數石工五十八人◎銅匠百四十七人◎石切三百九人◎石割二千人其他從來專ら男子の仕事にして最も不快を感ずる剝皮、溝渫等の如き、今日女子の仕事となれるを知らば、法律上特に制限を設たるもの丶外は、人類の仕事に最早男女の區別なきに至れりといへりとぞ。

◎紐育の婦人職業　紐育人口統計高の最近統計によるに、同市の婦人職業の種類及び之に從事する人員數は左の如しといふ。

一家婢	六二、三九四人	二裝束師	二二、四一六人
三洗濯女	八、三二六	四賣子	九、〇五三
五裁縫屋	八、一六二	六仕立屋	五、七五九
七卷煙草製造	四、九七五	八教師	四、五八三
九機織女	四、二三三	十給仕女	三、二五三
十一書記	二、九七六	十二婦人帽子製造	二、五七四
十三活版	二、五一六	十四商賣	二、四〇四
十五家事	一、九八五	十六簿記方	一、六七九
十七縫工	一、六二三	十八下宿業	一、五六九
十九シャツ製造	一、五二〇	二十タイプ、ライター	一、二七九
二十一音樂師	一、二七九		

◎流行春服の普通品

◎小紋縮御召は女物に最も適するものにして、價は一反十圓より二十圓◎小紋縮緬は黑流行し、十圓より十五圓◎八王子一樂、米澤一樂は重に男向、十三圓より十五圓◎風通は男女共に行はれ十三圓より十五圓◎糸織、十四圓より二十三圓◎博多織は男物、十一圓より十三圓◎越後節絲は大流行、五圓より八九圓◎絹綾セル女物にて十七八圓◎越後紬、銘仙、米澤も人氣よし五圓より十圓◎八王子八反は下着または書生羽織によく、十圓より十二圓◎相生變り八丈は七八圓◎此他友禪、八丈等は變りなく、裏地は空色と薄花色一般に流行す。

◎帶は繻織第一の流行品、男物十六圓より二十圓、女物丸帶二百圓より三百圓◎之に次ぐは緞珍、男物十六圓より二十圓、女物五十圓より百五十圓◎博多は男物五圓より十二三圓、女物十圓より二十五圓◎繻子出緞珍、男物七圓より十三圓◎女物の普通は唐繻子、十圓より十五圓、支那緞子にて八圓より十三圓。

◎男羽織は黑魚子の三紋又は五紋、久しく流行、紋の大さは一寸乃至一寸一分位當世、白地にて八圓より十五圓◎汐瀨は新流行、十五圓より二十圓◎女物は黑縮緬の三紋、紋の大さは七八分、白地十二圓より十七八圓。

◎袴は茶字にて十七圓より二十圓◎仙臺平にて十五圓より十八圓◎兩面博多にて三十圓以上◎風通にて十六圓より二十圓。以上いづれも裏地のみの價格。

時報

◎臺灣に於ける巖本社長　本社長巖本善治は、客歲十二月二日東京を發して、臺灣地方視察の途に上りたるが、同九日着臺以來、新竹臺北等に於て、或は國語學校、監獄、教會其他の諸視察をなし、且つ自から管理せる東京明治女學校內に臺灣女學部設立の事を發起して、臺地諸有志の贊成並に資金義捐を募集したるに、それ／＼贊成者ありて、好都合に運ぶべき景況なりしとぞ。また同臺灣女學部設立趣意書なるものは左の如し。

惟ふに斯の美島の士民をして美なる帝國の臣民たるに適當せしめんには蓋し其婦女子を教訓し家庭に新空氣を入れ日常風俗の地盤に新感化を施すを以て改善の方策中最も有力なるもの丶一とす聞く英米宣教師が本島に其道を傳ふるや主として此方策を取れりと云へり余今此地に歷遊して深く慨する所あり蓋し本島女子教育の太はだ緊要なるとを感じ先づ其數名を携へて內地に留學せしめ以て徐に他日の基礎を建てんとを發企せり

抑も明治女學校は今を距る十又三年前東京府下未だ私立の女學校あらざりし時日本有志率先の協力によりて初て設立せられたるもの也去年不幸類燒の厄に罹りて悉皆烏有に歸せしが忽ち四方贊同の助力を得て新に市外巢鴨村に敷地六千坪を購入し二階造洋館及日本館一百二十坪の校舍を得たり則ち此際を期とし十又三年來の教育に一歩を進め今や學課に多少の改正を施せり則ち世上今にしては普通教育の女學校夥多なるが故に明治女學校は有限若干の生徒に普通教育を與ふる外は主として高等教育を施こし更に別科を置きて他の普通女學校に於て教授せざる特種の教育を行んとを期せり之が爲め今や新に四方の贊助を要め益々として其基本を修築しつ丶ある也

因て思ふに明治女學校內に臺灣女學の一別科を置き先づ其數名を教育し他日直に本島內に女學を布くの一助たらしめんとは明治女學校の深く希ひ厚く任じて敢て萬一の用を爲さんと欲する所也則ち玆に某等を撰定して近く歸京せんとするに際し本島有志の諸君に贊同を請ふ願くは慨然として助力を賜へと云ふ

附則

臺灣女學の爲に寄附せられたる者は別途に積立て臺灣女學基本金と稱し其利子を以て留學生の出費に供す

右基本金は本島內各地及內地諸方に於て募集し漸次に畜積し他日本島內に女學を施くの用に供す

なほ同人は、此設意書に見えたる主意を以て、同地に於て、土人の婦女の、內地にて教育を受くるに志あるものを勸誘募集したるに、稍々奔走の上漸く二名丈之

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に感じたるを以て、自身同伴歸京すべき者なりしも、都合により去月二十五日同地を出發歸路に就きたるが爲めに、其運びに至らざりしも、彼等は今春三月頃には上京すべき都合なりといふ。なほ右にもいへる如く、巖本は、既に該地を發し、長崎、岡山、神戶、京都等を經て、目下歸京の途中に在り。（八日記）

◎特行の夫婦　山形縣米澤市越後番匠町櫻井半三郎は、早くより教員に奉職せしが、明治十年繼母傳瘋癲病に罹り、起居の自由を失ふや、直に職を辭して看護に從ひ、夫妻心を同うして孝養怠るなく、明治十九年其父劇症の脊髓病に罹るや、夫妻の煩歎替ふるに物なく、寢食を忘れて父母を看護し爲めに夫妻共に憔悴し、知らざる者は却て之を病者と認むるに至れども孝心少しも衰へず、隣佑の人々其篤行に感じ、長文の上申書を知事に提出し、知事は去廿日厚く夫妻に賞與せり。

◎孝子　讃州那珂郡丸龜町中村石松氏は赤十字社狂とまで稱呼さるゝ程、全社の事業に熱心なるが、氏は亦父母に事へて至孝なる趣きにて、今回總久知事より木杯及び賞狀を下賜されたり。其賞狀に、

平素孝道に厚く明治二十五年父を失ひ爾來一日も墓參を欠かず偶郷里を出づるや其出入必ず墓前に告げ其の之に事ふること生時に異ならず又老母に對しては常に其心目を樂ましめんことを力め一言一行も未だ嘗て逆ひし事なく本年二月老母偶病に罹るや其憂懼言ふ可らず日夜側に侍し專心之を看護するも病勢次第に激甚し遂に醫も匙を投じたるに如何なる重病者も水を咽下し得る間は助命の望みありと聞き其水を求め自ら遠く阿野郡金山村八十婆の水を汲み來り病者に飮め熱誠看護其功空しからず遂に高年の重病者も九死の中に一生を得漸次回復するに至り人其孝を賞せざるなし其至孝洵に奇特とす云々

◎貞婦　熊本縣新屋敷町安藤某の妻カツ子は、資性温順、舅姑に孝養を盡し、姑の全身不隨なるを看護すること十五年一日の如くにして怠らず、且夫婿に對して貞節なるを以て、此程同縣知事より賞金を授與せられたり。

◎山形縣の孝子　山形縣東置賜郡屋代村大字深沼の竹田喜内の長男清三郎は今年十七歳なるが、幼少の時より、内職を勵みて、また他人に使役せられて一家の貧窶を救ひ、且つ自ら得たる金を以て弟某の教育費に充つるなど、其志の殊勝なるを以て、隣人大に之を嘉し、是まで多少の金員を惠與したるものも少からずといふ。

◎百歳の媼と孝子　德島縣阿波郡八幡村大字粟島村に阿部家とて最も舊き豪家あり。現今の戶主阿部萬三郎氏に至りて九代に及び、家運ますく榮え行けるが、六代龜三郎氏始めて老人の敬ふべきを主唱し、饗老會と名けて、年々正月の元日に七十以上に及べる高齢者を同家に招きて叮嚀に酒食を饗應するの企てをなし、天保六年より慶應二年まで行ひ來りしも其間未だ百歳に達したる人なかりしかば、是れを恨みとなし居りしに、明治二十六年に至りて、同村の角野助次郎の母ツギといへるが丁度百歳の年を迎へたれば、當時の主人龜三郎氏は祖父の素志を繼ぎて同年一月一日ツギを招待し郡長、警察署長等列席にて祝盃を舉げし事あり。それさへめでたきに其悴助次郎は、孝行の譽れ高く十四歳にして父を喪ひ、母ツギ及妹二人と共に農業に從事せしが、家貧にして糊口を凌ぐに足らず、其頃母ツギは胸痛を患ひて、多忙の季節抔には頗る困難を感じたりしが、孝心厚き助次郎大に之れを苦に病みて、處々の神社佛閣に祈念を凝らし、妻マキと共に孝養を盡せしかば、母の病は次第に快方に赴きけり。此善行を以て助次郎は二十六年四月縣知事より木杯を下賜されたりとぞ。さて母ツキは昨三十年は百四歳の高齢に達したれど、以前の病身に引代へ耳目衰へず言語爽かにして壯者よりも健壯となりしかば同年自から糸を紡ぎて白木綿を製し宮内省へ献納したるに、奇特なりとの褒狀を賜はれり、態てツギは本年百五歳にて目出たく珍らしき年を迎へたれども、尙健全にして現存する子三人孫十一人曾孫二十四人玄孫一人ありといふ。

◎都門の貞婦　東京京橋區鈴木町十二番地與田方同居渡邊富次郎（九十）の妻ハナ（四十二）は、夫が去る二十五年頃より身體自由ならぬゆゑ、貧苦の中に厚く看護し、先達迄は空壜掃除の内職をなして一日十二三錢の資金を得て、自らの空腹を凌ぎつゝ、夫に奉事せしが、歳暮に迫りて其内職も無くなりしより、途方に暮れて非常の苦境に陷りたるを見て、隣人之を憐み、狀を京橋區役所に告げたり。區役所にては其實況を糺して、ハナの貞操を感じ、區長以下幾分づゝの金員を醵出して之を惠與し、また醫師内田某へ夫富次郎施療依賴の手續をなし與へたるが、同區警察署にてもまたこれを傳聞し、警部以下幾分の出金をなして、同人へ惠與したりとなん。

◎孝女肉を割いて父の創を補ふ　愛知縣西春日井郡枇杷島町青物商河合金次郎は、久しく太股の腫物に惱み其苦痛に堪へ難れ近傍の醫師に治療を受けたれど、捗々しからぬにぞ名古屋の病院に入りて治術を乞ひ、之を切斷したるが其切口の癒えぬを二女のおかく（十七）といふが焦慮りて、親の爲なれば我が肉を切取るも厭ふべきにあらずとて强ひて醫師に賴み己が右手の腕より廿四箇所の肉を切取り、父今次郎の傷を補ひたるにぞ、父の病は日を追ふて快く、傷口も早や元の如くに癒ゑたれば、おかくは其効ありしを喜び居るよし。

◎大坂の婦德會　過月大坂市の新町婦德會にて催す、慈善共遊會にては、會則の趣旨に基き、曾て四區二部の貧民に施米をなしたる賞として、大坂府知事より、木盃一箇を下賜せられたりといふ。尙ほ同會にては、開會毎に孤兒院の兒童を給仕に雇ひ、且つ先月にも、四區の貧民に白米十石以上を施行したるよし。

◎彰善會　惡事千里を走り善行隱れて顯はれざるを憂ひ、斯ては大詔に宣へる克く忠に克く孝に世々厥美を濟すの御趣意に戻るべしとて、此度高崎男爵其會長となり、二條近衞黑田等の家族其他の諸氏その評議員主事若くは賛成員となりて、彰善會なる者を起し汎く忠孝信義貞節慈善等の善行を奬勵するよし、今其彰

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

善の方法なりといふを聞くに、善行により公賞下賜相成りたる者は、其際會員に於て之を送迎し又表彰の式を行ひ、頌徳表若くは、金品を贈り、その略傳等を善行名譽錄に登載し、新聞雜誌に揭載し、其沒する時は會の名を以て弔詞を贈り、又古人に關する者は、評議員の議決によりて其事績を揭彙する等なりとぞ。

◎一家四夫婦兒孫五十六人　奈良縣奈良紀寺町に住める、同縣多額納稅者の一人木本孫治郎氏の父源治郎氏は、本年七十三歲、其妻そよ女は七十四歲の高齡を保ち、結婚後五十六年の間琴瑟更に紊れず、當主孫治郎氏は本年五十三歲其室のぶ女は、五十四歲、婚後三十六年にして三男四女を舉ぐ。嗣子源吉（二十七）氏は妻やすの（二十三）といふを迎へたれども就學の間、父祖奉養の爲めにとて長女のつト（二八）に、今より十二年前岩吉（三十二）氏といふ養子を貰ひ、此の間に三女を舉げ、家は四夫婦十一人に及び、尙孫治郎の同胞七人ありて源吉氏の同胞五人とともに各々分家したれば、孫玄孫を併せて總て五十六人、皆健康なる祥を迎へしといふ。是だとへ既に愛たき限りなるに此一家は明治元年以來、ことし三十一年を迎ふるまで曾て一人の喪事を營みたる事なしといふ。

◎天覽品の奉納　嘗て御買上の命に接し居たる女子職業學校生徒の製作品は二尺餘の鉢へ梅松の造花一鉢三十圓、孔雀の額面刺繡は二十圓等合計二百四十圓丈け昨年十二月下旬納め濟みとなりし由。

◎郵便貯金規則改正　郵便貯金預入者ゐしく減じ、拂戾を請求する者のみ益々多き傾向あるより、當局者間には、貯金手續法を一層簡易にして、郵便貯金法を奬勵せんとの議ありしが、去年十二月九日、遞信省令三十四號を以て、預け入を爲したる局所に於ては、預り金高の內十圓迄、又再度通帳を所持する者、其再度帳を受領したる局所に於ては、其繰越金高の十圓迄、即時拂の取扱を請求するを得。とありしを改めて、金高二十圓とし、又一圓以上の預金を殘し置くべし。との規定を、十錢以上と改めたり。又郵便爲替貯金管理所、及同支所々在地の貯金取扱局所に於て、貯金即時拂の取扱を爲さすとの條項は、刪除せられたりし。なほまた此迄貯金の利子は、一年四分二厘なりしが、近時市場金利の騰貴に比例して、多少利子を引上げんとの議其筋に起れりといふ。

◎海外女報

◎米國に於けるブース夫人　ブース將軍の二男にして、米國救世軍の司令長官たりしが、本營の命令を用ゐざりし爲、非職となりしブース氏の夫人は、去年十一月　十二日紐育府の音樂館に於て正式に新教の傳道者たるべき按手禮を受けたりといふ。

◎一婦人國會議員の候補者となる　米國ニューハンムシヤイアにて代言人とし、公證人とし、かつ政治家として名あるメリラ、リクカー夫人は、此度自州第一撰擧區の國會議員候補者として打ち出したり。

◎華盛頓女子大學　ピッツボルグのエリス、マーカー孃及びシカゴのクラーク、ミード夫人によりて、ペンシルバニア州華盛頓に一女子大學新設の企てあり。

◎婦人外交官の任命　此程米國外務卿シャルマン氏は、加奈太國ニュー、ブランスウイックのエドマンストン駐在米國領事アドルフ、ガイ氏の二週間の請暇と并に不在中エンマ、ハートなる一婦人を以て領事代理となすとの要求を認可したり。米國政府が、女子を以て外交官に任命すると、實に此事を以て發端となす。

◎紐育美人養成學校　紐育にアルベルトと稱する一婦人此種一の美人養成所なるものを起したり。其養成法は、口目鼻等の局部の練習より始めて、軀体一般の修養をなし、それより容姿の艷美なしむる術を教授すと。同婦人の說によれば、婦人は音樂を俯むるを以て、容姿艷美法の最上の手段なりといへり。また歐米の婦人は袋の如く亂臥するを事とす故に朝起後、其姿甚見惡しともいへり。

◎スタンレー以來の珍事　キューバ島叛氏の一巨魁シスネロの一女、西班牙軍に捕へられて、獄裡に投ぜられしを、紐育ジョルナル新聞主幹ハルスト氏がカールテッカーなるものに命じて、此孃を救出せしめて、米國新聞社會は、スタンレーがリビングストン搜索の爲亞弗利加遠征をなしたる以來の珍事として之を喧傳す。

◎米國に於ける支那婦人　桑港の支那人總員は二萬人にして、其中婦人の數二千五百なり。此二千五百の婦人中、正當家妻たるものは、千名にして、他の千五百名は、全然奴隸の境遇に在るものなり。此等の婦人の多くは、本國にて誘拐せられ米國に來りて後、詐僞を以て稅關を通過せしめらるゝとも、其後は假令、其僞られたるを覺るとも、誘拐者の手を離れては活路なきが故に、止むなく其意に從ひて、奴隸商人の市場に持出され、競賣に附せられ、其多くは米國支那妓樓に無限の年期にて賣らるゝなり。現今桑港にて九歲乃至十二歲の支那小娘は百五十弗乃至五百弗を價し、十二歲乃至十六歲は五百弗乃至一千五百弗を價し、以上年長者ならば三千五百弗を値ひするものありといふ。

◎白耳義の公立割烹及び裁縫學校　曩に官命を帶び教育制度調査のため歐洲各國を巡廻したる英國文部書記官の觀察に據れば、白耳義國にては夥多の勞働者を有する市府には到る、處公費を以つて維持する家政女學校の設けあらざるはなく、而も此種の學校中最も完全なるものなりといふ。又同國の公立割烹學校に於て、女子は一法半にて六人分の晝食を調理するを得、而もこれに使用する材料は各季節の食品より成らざるはなし。概して富裕なる家政を標準とする他國の割烹學校と其の趣きを異にする白耳義の同學校は將來一家の主婦たるべき女子をして、精確に一家の生活費を計算し得ること習熟せしむべければ勞働者社會の經濟上の狀態に大影響を及ぼすべきものと見ゆ。又、同國の裁縫學校の右の割烹學校と同樣實益を目的とし總て華美なる刺繡の如きは之れを除き、專ら女子をして必要なる襯衣類、並に單純なる室內及び外出用衣服を調製し得しむるを主とするものなりとぞ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝと數十回、一代の流行を左右して一時少年の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行總て甘露慈雨の如し、讀み去り讀來るうち讀者亦自ら化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、嘗て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち茲に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館
大賣捌　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

女學雜誌一手賣捌　東京神田表神保町　東京堂

家庭新聞

毎月　曜日　發行

一部金二錢　十部前金十九錢　二十部前金三十七錢　郵稅一部五厘宛　爲替拂込は銀座爲替取扱所宛　郵券代用一割增

方今新聞の種類少からずと雖も多くは高尚に流れずんば野卑に陷り、甚だしきは醜聲を傳へ淫事を報ずるを以て任となし其兒女を蠹毒し家庭を混濁すること少からず本紙は此の通弊を矯め善良なる**家庭の好伴侶**たらんことを期し努めて**孝子節婦**の美譚を掲げ純潔にして趣味ある**小說**親切なる**家政育兒の心得**さては日々臺所の料理法、小兒の御伽噺、流行品の狀況、衛生の注意茶道生花裁縫の指南一切の禮式等に至るまで凡そ**家庭に必要**なる諸種の事項は一切網羅して洩すなくいと平易なる文字を以てこれを記述し總傍假名に挿畫を加へて何人にも讀み易からしめ外に當今大家の家庭に關する意見を載せ**教訓と娛樂**とを併せ得せしめむとす江湖家庭改良に志あるの諸君本紙の主義を賛し之を購讀せしめ與に一國富强の本に盡されんことを祈る

京橋區加賀町十四番地　家庭新聞社

東京裁縫女學校々長渡邊辰五郎著

裁縫教授書

全部三冊
定價金一圓

取次販賣　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

●子爵長岡護美君題字●邦舟木村敬君序●
●鼎軒田口卯吉君。文學博士井上哲次郎君序●

古城貞吉君著

新刊

支那文學史

全一册

菊判七百卅餘頁
布表紙美本
定價壹圓八拾錢
郵税を要せず

支那文學は日本文學の母たれば、之が歴史を修むるの必要なるは固より論なし、然るに世未だ完全なる支那文學史の著なきは夙に遺憾とする處なりしが、今や著者が數百部の漢書を渉獵參考して數年の刻苦を費したる此の大著成れり、篇を分つ九、曰く支那文學の起原、諸子時代、漢代の文學、六朝の文學、唐朝の文學、宋朝の文學、金元間の文學、明代の文學、清朝の文學是なり、而して毎編亦之を數章に分つ、支那文學三千年の事蹟を叙するに謹嚴莊重なる文字を以てし、毎篇歴代大家の小傳を掲げ精粹を拔抄す、實に古今未曾有の大傑作なりとす

發行所 東京京橋區彌左衞門町 合名會社 經濟雜誌社

賣捌所 東京。丸善、小林、哲學書院、中西屋、團々社●大阪。岡島、梅原、松村●京都。大黑屋、東枝、其他書肆

故鈴木弘恭大人講述

第六版

百人一首講義

附錄 小倉のてびき

正價金廿八錢
郵税四錢

本書の講義の甚だ叮嚀親切なる、又其釘裝の頗る清楚なるは世上既に公評ある處にして、版を重ぬると亦六回に及へり。小倉山莊の障子に、百人一首を撰書して、幽寂を味はへりし定家黄門の詩趣を知らんとせは、此講義に就くに若くはなけん。

櫻井成明譯
希臘孝子 **腓立比物語**
正價金二十八錢
郵税金六

若松しづ子英文集
巖本嘉志子
正價金六十錢
郵税金六

佐川靜淵 小此木秀野 合著
俳諧史傳
正價金二十七錢
郵税金四錢

出版元 東京巣鴨村字庚申塚 女學雜誌社◎大取次 東京神田表神保町 東京堂

恭賀新正　女學雜誌社

生義客臘臺灣へ渡航し歸路關西地方漫遊中に有之候爲歲始の御禮を欠ぎ候段以紙上奉謝候也

旅中　巖本善治

謹賀新禧　櫻井鷗村

女學雜誌編輯上の用向並に雜誌及書籍等寄贈の節は必ず左の名宛にて御差出し被下度候

東京麹町區下六番町六番地　櫻井鷗村（彥一郎）

女學雜誌社出版及取次書目

著者	書名	正價	郵稅
巖本善治著	公娼可滅	正價金三錢	郵稅金二錢
橫山雅男著	婚姻論	正價金十二錢	郵稅金四錢
中島とし子著	小說 善惡の岐	正價金十七錢	郵稅金四錢
本社編	小供の話	正價金四錢	郵稅金二錢
同	兒育草	正價金十二錢	郵稅金二錢
炭谷小梅著	藝者と手掛	正價金二錢	郵稅金二錢
阿波鳴門左衞門作	戲曲 桂吾郎	正價金十錢	郵稅金二錢
巖本善治著	吾黨の女子敎育	正價金十錢	郵稅金二錢
同	日本女學	正價金四錢	郵稅金二錢
故鈴木弘恭述	文法口授	正價金十二錢	郵稅金二錢
池袋清風著	淺瀨の波	正價金二十八錢	郵稅金四錢
同	同第二篇	同	同

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY